

桂——唐詩におけるその〈意味〉

山之内正彦

一 序 論

一の一 景物論の考え方

『唐詩植物語彙集成』⁽¹⁾といった一書がありうるとして、その一項目を書くという態度で「桂」に関する唐詩の諸表現について包括的な記述を試みる、というのが私の課題である。本稿はその第一部であるが、全体の前置きとして、基本的な立場と考え方について一言しておく。

まず、断るまでもないが、われわれの対象は詩のことばであって、植物学の実体ではない。実体を関心の外に置くという意味ではない。詩の表現に関するかぎりにおいてのみ、実体の諸相を問題にする立場を採るという意味である。詩中の草木（にかぎらず自然物一般）を表現の場で捉えようとするとき、〈景物〉〈詩語（詞藻）〉〈詩句〉という三

層の範疇を考えることが、中国古典詩の実情に即してゐるだろう。詩中の題材として価値づけられた自然物一般が景物であるが、右の表現構造における景物とは、当該の自然物に関わる意識の共同性（好みなら規範・類型・集団性などといつてもよい）を意味する。いいかえれば、その自然物を詠じた個別の作品・詩句から抽出しうる共通の觀念・意味・像等々の総体である。この共同性は、通時的にはむろん変化（通常豊富化）するが、共時的には、詩人にとって、ひとまず所与の規範として出現するだろう。詩句は、いうまでもなく、景物の共同性が詩人の個と出会う具體的・一回的な詩の生成の現場に他ならない。ここで特に「詩句」をいって「詩（作品）」をいわないのは、摘句のみを眺めていれば事が済むと考えるからではない。有機的な全篇の一環でない詩句がありえないことは自明である。ただ、中国古典詩のことばの特質から、抒情の単位としての詩句の独立性と比重がきわめて大きいことは否定できない。景物が詩に客体化されるとき、少くとも最終的には、どうしても詩句という凝集のレベルを通過しないわけにはいかないのだ。ただし、詩句の語で、単句だけではなく、複句（近体詩なら聯）をも意味させる。これも中国古典詩の基本的な構成原理からして、当然のことであろう。文中の挙例を多く二句としたのは、必ずしも一一長文を引用するわけにゆかぬという便宜のみによるものではない。したがって、詩句とは、詩篇全体に位置づけられたかぎりにおける単・複句（聯）の意であつて、詩句の引用に当っては、必ず全篇の読みを先行させてある。

詩句における個と共同性の出合い方は、考えうるかぎり多様だが、ことばとしての景物が一字に集約される場合、景物の共同性を個別の詩句に生成する創造行為の中軸として、しばしばもっとも重要な媒介となるのが詩語（詞藻）、すなわち、当該の一字を含む圧倒的割合で二字、ときに三字の詩的語結合である。そして、詩語自体、一方で先行する用例の集積から発する強い規範の力をかぶりながら、他方で漢語の旺盛な造語力による不断の増殖が進行する生成

の場であつて、豊富化の速度は景物の層におけるそれよりはるかに大きい。個別の詩句を創出する詩人は、景物の共同性が包含する諸要素と詩語の集積に対して、自己の主題と想像力の質に従った選択と改変を加えるわけだが、この両者―景物の諸要素と詩語は、しばしば交叉する関係にある。たとえば、「桂枝」というもつともありふれた詩語をとれば、景物としての桂に含まれる隱遁・人格・友情・月桂・科第等、さまざまな詩的意味を表出する詩句のすべてを横断して、その用例を見出すことができる。

以上の表現過程の構造にかかわる範疇に対して、表現内容にかかわる範疇として、古典詩学で詩句についていわれる〈情（虚）〉〈景（実）〉と、これを景物の次元に移した〈意味〉〈像〉の対置を考える。詩句の分類に情・景の二種を立てることが有効なのは、ひとえに心情表出と情景描写を対置・均衡させる方法が唐詩のきわめて有力な詩法であることによるが、六朝詩との比較上唐詩に顕著な傾向は、この景の句の具体的・一回的感覚対象性が強化されてくることであろう。あまり適当な名称ではないが、この性格を〈実景〉性と称しておく。対象に臨場しているかいなかは問わないから、「矚目」を含みつつ、より広い概念である。

〈意味〉とは、景物に賦与された観念・象徴的意味・神話的宗教的幻想などの人文的意味づけである。主として典故に由来し、その大部分は広義の人事への比喩と見なすことができる。〈像〉は、骨格に当る〈意味〉に肉づけする形象的なものを中心とする諸要素で、主として景物の自然的・感覚的側面をかたち作る。景物を含む詩句は多くは両者の交叉・滲透において成立する。

右は当面の対象である桂を典型として描きうる図式であつて、景物の種類、レベルの置き方によつて、必ずしも右のような整理が可能とはかぎらない。「草」「葉」といった類概念の場合、これ自体を景物として扱うには茫漠にすぎ、

共通の詩的内容を引き出す単位としては考えにくいから、たとえば「春草」「紅葉」などの語に、景物と詩語の二層が重なるだろう。また次項に述べる牡丹・海棠などの景物では、詩語の展開がはなはだ貧弱であり、〈意味〉の形成も唐詩の段階では皆無に近い。逆に甘棠・棠棣では〈像〉的側面が貧しくなる。しかし、多かれ少なかれ分岐した〈意味〉を持つ唐詩の代表的草木の種については、上記の図式を描くことがかなりの程度まで可能かつ有効であるはずだ。

さて、上記の共時的な枠組みにおいて捉えられる個別の詩句は、いうまでもなく通時的な詩史の流れのなかにそれぞれの位置を占めて生起する。個別の詩句の深さ・質は、詩史的展望のなかで、然るべく測定・評価されるだろう。景物の共同性との緊張関係における詩人の個の十分な把握がはじめて可能になるのは、論述のこの段階においてである。

私は詩の言語論をともに学んだ者ではないから、以上の図式はほとんど自明の常識の域を出ず、理論的には穴だらけだと思うが、さし当りこの程度の図式で押し通してみる。強力な規範の下に豊かな表現の可能性がいかに関開するかという、中国古典詩の景物論における主要な、そしておそろしく錯綜した局面を多少なりと交通整理するためには、みすばらしくとも何らかの見取図を用意せざるをえないのである。

論述の順序は右の図式に従うことになる。予想される章別構成を掲げておこう。

一、序論

二、唐詩における桂の〈意味〉（一部別稿）

三、唐詩における桂の〈像〉（以下別稿）

四、桂の詩語

五、桂の詩史と詩人 1) 六朝まで 2) 唐詩と詩人

若干のコメントを加えると、まず、われわれの歩みが共同性から始まって(二・三)個に終る(五)という次第をとることは、景物論というテーマからして必然的だろう。したがって、二・三では、引用の詩句は原則として価値評価を含まず、資料として平等に扱う。また、初盛中晩を一個の言語場とみなすことの無理は承知の上で、二・三では原則として共時的立場をとり、六朝詩までの展開についても、典故の指摘は別として、基本的には五1)に譲る。ただし、五では個々の要素に即した記述は不可能だから、それぞれの項についての簡単な通時的觀察を加えるという便法をとった。しかし、二a 嘉樹・仙樹、二b 脱俗・隱遁の項は、詩史的通觀の際に中心的話題となる部分であり、紙数の都合もあるので、この点については若干の予想を述べるにとどめた。

相互に交叉する関係にある二と三、及び二の各項の区分は、活物である詩の表現を強制收容する枠組みにすぎないから、整合的にゆかない個所が続出するのはやむをえない。特に二の各項は、具体的用例における意味の重層性と連続性の存在を当然の前提として立てられたものである。あくまで、個別の詩句のなかに包まれる意味の要素あるいは層であって、各用例がどこかの一項のみに帰属するような分類項目として考えられているのではない。また、各項は必ずしも同一基準にもとづいて分類されたものでもなく、同一平面に並列するものでもない。要するにはなはだ便宜的なやり方に従っているのであるが、同時に便宜がすなわち桂という景物の生態の実情に即しているという面はあるはずだ。

二(と別稿の三)の記述は、おそらくはなはだ羅列的な印象を与えるものにならざるをえないが、これは、唐詩の

ことばの世界の端倪すべからざる複雑・錯綜した在り方が、桂という恰好の景物を通して顕現してくる相貌であるとして、勘弁していただく他ない。

四は桂字を含む詩語の一覧。個的視点はこの段階から必要になってくるだろう。語結合の文法構造により分類排列し、使用頻度・初出例・対句などを掲げ、重要度に応じた解説を加える。

五は桂の詩史の通観と、そこに直交する唐詩人の個的表出の、価値評価を含めた位置づけ。

当初は二の全体を本稿に収める予定だったが、枚数制限のため一部を別稿に廻さなければならなかったことを断っておく。

詩的意味の各項の記述に入るに先立って、さらに二つの予備的考察を追加する。唐詩の草木のなかにおける桂の位置について一視点を提出すること、及び桂の名実関係についての二点である。

1 このような書物の編纂が具体化しているわけではない。ただし、数年前から前野直彬先生の指導下に、数名の学徒による唐代詩語の研究会が続行中で、当面植物関係のことばを対象とし、ゆくゆくはこのようない書を編むことを目標に置いて、現在までに相当量のカードが集積されている。本稿は一応右の事情を念頭に置きつつ執筆したものであるため、事典的記述の性格が強くなった。なお、上記カードを利用させていただいたことを、同研究会の諸氏に感謝する。

二の二 唐詩の植物における桂の位置・一つの視角

唐詩のことばの世界はまことに広大複雑で、その全体構造に筋道をつけようとするとき、どんな枠組みを用意するにせよ、茫洋として手を束ねる思いを禁じえないのだが、この多様さを産む大きな原因の一つとして、共時的な場に

通時的な展開の各層がほとんど消え去ることなく堆積・並存するという事態を挙げることができる。過去に対して能うかぎり鄭重であると同時に、新たな対象と表現・造語に向って閉ざされぬ開放系でありつづける——これは中国古典詩の生命が涸渇しないかぎり、時代を通じてそのことばに働きつづけた活力であって、唐代に限られた現象というわけではないが、対象と感情の拡大が詩のことばにも画期的な拡大をもたらし、右の事態が初めて大規模なかたちで、とりわけ鮮明に出現したところに、唐詩の歴史的位相を見ることは許されるだろう。

われわれの話題である植物についていえば、拡大は、景物として詩中に登場するその種類においてよりは、一種の植物に付与される意味・像においてより著しく、さらに、種にかかわるものであると類概念にかかわるものであるとを問わず、詩語のレベルにおいてもっとも多彩に展開しているのであるが、唐詩に初登場する新顔の草木というのものが少ない。そこにはたとえば牡丹や海棠など、以後景物としてかなり重要な役割りを果たことになる植物も含まれている。

当然のことながら、この種の新顔は、過去から継承した意味・像の堆積を一切背負っておらず、すべての表現が唐詩人の自前の創出によって賄われることになる。

盛唐に始めて詩中にうたわれるようになった牡丹⁽¹⁾の場合も、中唐に登場したらしい海棠⁽²⁾の場合も、利用すべき表現上の遺産はほとんど皆無であったから、イメージはすべて一次的な実体の観察から引き出されるほかない。そして、「牡丹」「海棠」ということば自体が指示的機能以上の含みを持つことは、登場の当初においては不可能に近い。

一般に、新登場の景物の場合、安定した抒情的価値を獲得するに至る時間が不十分だから、慣用の語に対置する一語として（たとえば対句において）用いられる機会はより少く、題詠の素材として新奇な対象に詩的内容を与えてゆ

く、というケースが多くなるのが当然であり、唐詩における牡丹や海棠にはなおそうした傾向が濃いと思われる。しかし、海棠の例であるが、晩唐の薛能の七律「春日寄懷」の頸聯に

1 臘月正當寒食夜 臘月 正に當る寒食の夜

春陰初過海棠時 春日 初めて過ぐ海棠の時

があつて、「寒食夜」に対する「海棠時」という語の結合によつて季節感が表出されており、この花がすでに一定の抒情的価値を公認された景物に成長しつつあることを窺わせる。このような素地の上に、海棠は宋詩・詞に至つて全面的な開花を迎えることになるのだが、唐詩においては、ゼロから出発したこの花の短い表現史が、晩唐に至つてようやく景物としての共同性を獲得する段階に到達したと見てよいだろう。もう一つの特徴としてつけ加えるべきは、これらの遅れて到着した草木では、語源のよく分らない牡丹⁽³⁾にせよ、「舶來の棠」である海棠にせよ、当然のことながら一字に縮約できず、したがつて二字の熟語を作ることが不可能である、すなわち詩語を形成する造語力が貧困にならざるをえない、ということである。

ところで、「棠」字を共有する、したがつて海棠と近縁と考えられていたであろう植物で、唐詩に現われるものに、他に棠梨・甘棠・棠棣の三種がある。⁽⁴⁾この三種は、いずれも「棠」と省略されて他の語と結合し、野棠・棠陰・棠樹・棠葉・棠花どの詩語を作っているので、一見紛らわしい。しかし詩の景物としては、それぞれまったく別の意味を与えられていたから、唐詩人にとつて混乱の生じる可能性はありえなかつたろう。

わずかな例外を除けば、三種のうちで詩において実体が直接感覺対象として捉えられるのは棠梨だけであつて、春寒食の頃に白花が簇⁽⁵⁾つて咲き、秋には黄・紅に葉が色づく、そしてしばしば郊野のさびしさを感じさせる花木だった。

これに反して、甘棠・棠棣では、実物への直接的関心が介入する場合は例外としてよい。両者はともに詩経に典故を持ち、前者は召南「甘棠」にもとづいても、つばら地方官の徳治を、後者は小雅「常棣」の常棣と混同され、もっぱら兄弟の親愛、あるいは兄弟が榮譽を共にするさまをいうために用いられる（唐詩では、どういふわけか、本来の常棣はあまり用いられていないようだ）。当時この二種に比定されていた植物の現物が一般の唐詩人によってどの程度意識されていたかはなほ疑問で、詩を書くかぎりにおいての唐人の脳裏にあったものは、甘棠では、「蔽芾たる甘棠、翦る勿れ伐つ勿れ、召伯の茝りし所なり」云々の『詩経』の本文と注疏による、召公がその木蔭にやどって民の訴えを裁き、彼らがその紀念として樹を大切に守ったという知識、棠棣（及びこれと音通で、同じく常棣と混同された唐棣）では、「常棣の華、鄂不韡韡たり」（訓詁は鄭箋による）の本文と注疏による、この花が兄弟和睦共榮の輝かしさを象徴するものだという知識の外に出るものではなかった。要するに、棠（唐）棣なら花（萼）と光輝、甘棠なら樹・枝葉とその木蔭という、典故に言及のある範囲内に想像力の働きが限定されているわけで、その他の部分・形状・性質はほとんど意識に上らなかったといつてよい。

このことは当然の結果として、牡丹・海棠ほどではないにせよ、やはり造語力に強い制限を加え、先に列挙したものの他には、棠頌・召南棠・鵲棠・愛棠といった、「甘棠」の説話の植物自体以外の側面に由来する語が若干発見されるのみである。これらに「棣」字を含む棣萼・棣華を加えれば、唐詩に出現する甘棠・棠（常・唐）棣関係の詩語はほぼ尽されるだろう。また、詩語の数の少なさと同時に、両者のあいだには、同じ棠字を用いながら、棠陰・棠樹・棠葉なら甘棠、棠花なら棠棣という、結合する語に対する明瞭な選択が生じることになる。「野」のような具体的な生態に関する修飾語になれば、どうしても棠梨以外には結びつきようがなかった。

さて、右のように、典故を中核とする通時的負荷及び名（称）実（体）の比重という視点から、甘棠・棠（唐）棣と牡丹・海棠とを唐詩に登場する植物の両極に置くなら、桂は、一応この両極の中間に位置する性格を持つということが出来る。ということは、この樹木が、桃・楊柳・松・竹・蘭など、用例も多く、唐詩の景物として重要な役割を担う、その意味でごく一般的な草木たちの一群に含まれることに他ならない。これらの草木は、いずれもいくつかの典故を持ち、前代までの永い表現史のなかに夥しい用例が蓄積されて、多様な意味の分岐を示しながら、六朝詩から唐詩への大きな自然観の変化に従って、共同的な觀念から実体に即した一回的感覚対象性に至る幅広い詩的性格のスペクトルを展開しているものである。その多彩さの重要な一環として、一字の名称ゆえに、自由に他の語と結合して、二字（ときに三字）の詩語を産みつづけるという、活発な造語力をも付け加えなければならない。

唐詩の桂の用例は千余に上り、題詠の詩も三十余首、他の植物についての用例の採集が集んでいないので正確な比較はできないが、この数はおそらく第一級のもので、桂も先に挙げた植物たちとともに、唐詩人の愛を受けることはなほだ深かった樹木であることをものがたる。しかしそれらの植物のなかでも、この樹木の持つ詩的性格には独特のものがあるようだ。単純に前記の両極からの距離を測れば、桂はたぶん中央よりはいぶ過去からの負荷の重い方に位置するだろう。つまり典故の影響が強い。唐詩に至って、桂もまた、実体への感覚的指向がしだいに有力となり、矚目の景としてうたわれる例も少からず現れてくるのだが、全用例を量的に眺めるなら、何といっても典故に由来する觀念性・幻想性の比重が大きく、一見純粋な矚目の景のように見える詩句でも、典故による意味がひそかに滲透しているという場合がきわめて多いのである。

しかし、このことは、桂の表現力が典故に呪縛されているとか、觀念的であるが故に貧しいなどということの意味

するものではない。まず、典故の種類がこれほど多く、詩的意味の分化がこれほど多岐にわたる植物は、あまり類がないだろう。その大部分は、抒情詩の本格的な発展に先立つ先秦から漢代までに用意されたもので——なかでも『楚辭』の影響が決定的だった——この樹木に古くから中国人がなみなみならぬ関心と愛着を寄せていたことを示しているのだが、詩にとって重要なのは、この多様な意味のうちのかんりの部分が、詩史を貫く活性を保持して、大量の詩句と詩語を増殖しつづけているという事実である。このような様相は六朝詩にもすでに見られるが、唐詩に至って、「桂林一枝」のような新たに採り上げられた典故も加わり、全面的に開花した。これは同時に、観念と感覚、意味と像の滲透によって不斷に豊富なイメージが創出される過程であって、そこには、先の甘棠・棠棣の場合とは対照的な典故の在り方が認められるのである。

一般に、観念と感覚・意味と像・知識と実体の対峙と滲透によって形成される重層的な表現構造は、通時的堆積の共時的並存とある程度重なりあいながら、中国詩、特に唐（及びそれ以後）の詩のことは特徴づけるすぐれた性格の一つとなつてゐるのだが、桂は、唐詩のことばのこのような性格を、一個の景物のうちに集約した姿で示す植物だといえるのではないか。とするならば、景物、詩語としての桂を論ずることは、単なる一植物について訓詁をこえた意味を持つはずである。

* 引用詩句の所在その他については、末尾に付した「引用詩句一覧」にまとめて記載した。唐詩は正字体、漢魏六朝詩は斜字体で、それぞれの通し番号をつけ、「一覧」と対照させてある。注に詩句を引く場合も、書名の略称は右の「一覧」の凡例に従う。長い詩題は、本文では適宜一部を省略することがある。なお、詩題の訓詁は省略した。

1 現存する牡丹の詩のうち、最初のものは、王維「紅牡丹」（全一三〇四、別二五三）と思われる。有名な李白の「清平調詞

三首」(全一七〇三、別三〇四)も一応同時期のものに加えてよいだろう。詩中に牡丹の語を用いたものでは、岑參「左僕射相國冀公東齋幽居」(全二〇三九)の「玉佩胷女蘿、金印耀牡丹」が早い例。盛唐以前の詩に牡丹は発見できない。『西陽雜俎』前集卷十九牡丹の条に、謝靈運の集に「竹間水際多牡丹」の句があるというのは、おそらく誤伝である。以上、斎藤茂氏の指教による。

2 海棠の詩における初出は突き止めていないが、李紳「海棠」(全五四七九)あたりが初期の例ではないか。因みに、杜甫が西蜀に住みながら名産の海棠を詩に詠じていないことは、後人の話柄とされた『韻語陽秋』卷十六が、このことを最初にいいだしたのは、晩唐の詩人薛能で、その「海棠」(全六〇五一)の詩の序に「蜀海棠有聞、而詩無聞、杜子美于斯、興象靡出、沒而有懷」云云といい、同時の鄭谷「蜀中詠海棠」全(七七三四)にも「子美無心爲發揚」の句がある。

3 李時珍は『本草綱目』卷十四で、「牡丹以色丹者爲上、雖結子而根上生苗、故謂之牡丹」というが、この多分にこじつけめいた説の出処は不明。

4 他に沙棠があるが、これは『山海經』西山経に見える半ば神話的な植物なので、ここでは除外しておく。

5 李商隱「寄羅劭興」(全六一四五)の「棠棣黃花發、忘憂碧葉齊」が、ほとんど唯一の例外である。

6 劉禹錫「寄陝州姚中丞」(全三九七二)の「相思望棠樹、一寄商聲謳、白居易「送陝府王大夫」(全五〇四七、別五七〇)の「他時萬一爲交代、留取甘棠三兩枝」などでは、たんに地方官一般ではなく、『禮記』樂記・「公羊傳」隱公五年その他の周召分陝說話に拠り、陝州を特に召公の故地とする意識が加わっていると見られる。

7 毛傳を敷衍する正義の説に従って訓めば、「常棣の華、鄂として韓韓たらずや」

8 前節注1)のカードに筆者の採集した材料を加えた数字で、総数約一〇二〇。筆者の採集範囲は、前稿「落日と夕陽」(『東洋文化研究所紀要』第六十三冊)と同様で、盛唐までは『全唐詩』収録の全作品、以後は同書で一卷に立てられている詩人の全作品に一応目を通した。この範囲は、おそらく『全唐詩』収録全作品の七割以上をカバーしていると思う。

前節で景物としての唐詩の植物の両端を代表する例として挙げた牡丹・海棠と甘棠・棠（唐）棣の二グループでは、実体とことばとのあいだに厄介な問題が生じる可能性はない。前者では名称は実体から遊離しておらず、実体を經由せずに名称と觀念が直結するなどという事態は起りえない。まさしく「名は実の實」なのだ。

後者の場合、名実の關係は、名物学者や植物誌家にとっては中心問題となるだろう。しかし、詩經の、ではなく、唐詩の景物としてこれらを扱うわれわれの立場からは、この場合もまた名実の關係ははなはだすっきりしたもので、単純化すれば、存在するのは名称に従属する若干の連想のみ、いわば「実は名の實」という逆転した關係である。

兩極の中間に位置する唐詩の代表的植物たちの場合には、多かれ少かれ、名の荷う由来と、実に向う視線とが、それぞれの草木に固有の表現域を織り上げているわけで、典故の落す影がきわめて濃い桂において、それにもかかわらず甘棠・棠棣のような規範の固定化が生じなかったのは、実体への強い関心が、觀念・幻想の規範性を活性化する力として、先秦以来歴史を通じて底流しつづけていたためではないかと思われるのである。

しかし、唐詩における桂の名実關係がとりわけ厄介なのは、古来「桂」の名によって呼ばれる樹木に大別して二種類があり、しかも、唐詩の全用例が必ずそのどちらかに収容できるほど明瞭に二分されているとはかぎらないが、どちらかを比較的明瞭に意識している用例もまた少くない、といった実情にあるからなのだ。すなわち、香木の桂と花木の桂である。

香木の桂。まず『莊子』『戰國策』『楚辭⁽¹⁾』などの先秦の文献に見える桂は、貴重な香木であるという以上の詳細は不明で、現在の種名に比定することはむづかしい。しかし、花についての言及がなく、香料・香辛調味料・建築材などに用いられているから、少くとも花木のもくせいではありえない。

降って『神農本草』『名醫別錄』以下の本草書が桂の項に主として記述するものは、辛味のある樹皮・枝・根を医薬・香辛料に用いる、くす科にくけい属の常緑喬木で、代表種は漢名肉桂、和名にくけい・とんきんにくけい、英名 *Cassia* であるという。主産地は嶺南・ヴェトナム地方。従って嶺南の地の香木として桂が詩にうたわれるとき、その植物学的実体は肉桂である場合もあろう。しかし、肉桂に固有の特徴（桂字の起源とされる、葉に顕著な葉脈が二本あることなど）によって、明確にこの植物であると比定できるような叙述のある用例は見当たらないようであり、われわれの立場からして、種の穿鑿はあまり意味があるまい。先秦に始まる桂の表現史の源泉が香木の桂にあり、少くとも発生時においてその觀念・幻想を支えた植物学的実体を求めれば、そのうちの一種として肉桂が考えられる、というくらいの認識で十分だろう。

花木の桂。漢魏六朝詩に比べて、唐詩では桂花をうたうことがはなはだ多い。その大部分は日本のもくせい、漢名木樨（木犀、別名山桂・巖桂）に比定してよいだろう。すなわち、秋期に濃い芳香を放つ花を簇生する、もくせい科の灌木あるいは小喬木である。北方にも栽培されたが、原産地は中国南部。唐詩で桂花の色を白といい、雪に喩えるのはぎんもくせい（漢名銀桂）に当るであろうが、丹桂と呼ばれるものがぎんもくせい（漢名金桂）かいなかは検討を要する⁽²⁾。唐詩の桂にはこの他にもさらに別種あるいは別品種と思われるものが存在するが、この点についての説明は第三章に廻すことにする。

右のとおり、香木の桂と花木の桂は本来まったく別種の植物なのであるが、芳香を持つ部分に違いはあれ、いずれも香り高い常緑樹であり、中原からは南方に当る長江流域以南の地を主産地とするため、同種の植物と考えられ、同名で呼ばれるようになったものらしい。漢代の歌謡にすでに桂花を詠じたものがあるから、この混同はかなり古くか

ら生じていたようだ。

唐人のなかでも、自ら数種の桂を栽培、題詠している李德裕⁽⁴⁾のような人物はいたが、一般の唐詩人にとっての桂とは、香木と花木の双方から発生した多様な詩的内容の複合体なのであって、唐詩の桂全体を一括して捉えるなら、それは一個の想像上の構造物であり、そのままでは対応する実体を持たぬ幻想的樹木ということにならざるをえない。さらに、景物としての桂のこの複合的性格は、全体の次元で出現するというにとどまらず、実景として花木の実体がつたわれているときにも、しばしば多かれ少なかれ香木に由来する連想がつきまとうというかたちで、個々の詩句にまで及んでいる。どちらかといえば香木は観念の側面から、花木は実体の側面から、一個の景物としての桂に詩的内容を与えているといえるだろう。

共通の一語、一字が使用されながら、三種の植物の違いが明瞭に意識されていた「棠」の場合とは反対に、訓詁学のいわゆる析言に相当するものが存在せず、二種の実体に由来する内容が渾言のうちに混在するという事態は、少くとも唐詩の代表的植物のなかでは、他に類似の例を見出したいだろう。

推測にすぎないが、本草や名物の専門家でなくとも、両者が別物であるというくらいの認識は、大方の詩人が持ち合わせていたのではないだろうか。それにもかかわらず、あくまで両者を同一の語のもとに同一の樹木として表象しようとしてきたところに、漢から唐に至る長い詩史に一貫して働きつづけた景物としての桂のアイデンティティと自己増殖力を認めないわけにゆかないのである。

宋代になると、花木の桂には木樨⁽⁵⁾（犀）という専称が登場し、詩中にもこの名称が用いられるようになる。⁽⁶⁾ こんなところにも、宋人の合理性が顔をのぞかせているのかもしれないが、それはともかく、唐代までの詩史がおそらく無

意識の共同意志によって維持してきた一個の詩的構成物に、ようやく分解のきざしが現われてきたということではできそうな気がする。

唐詩の桂は、わが国ではしばしば「もくせい」と翻訳されている。唐詩では桂花を詠じることが多く、また唐人の通常の行動圏でもっとも実見の機会が多かったであろうところから、唐詩の桂に木犀の占める比重が大きいことは否定できない。したがって、この翻訳が誤りというわけではなく、当たっていることももとより少くないのだが、その場合にも、けっして桂イコールもくせいでないことは、以上の説明から明らかだろう。

それ故、本稿では特に問題にする必要のある箇所を除き、実体についてそのつど顧慮することなく、桂を単一の景物Ⅱ詩的植物と見なして記述を進めることにした。

1 『莊子』人間世「桂可食、故伐之、漆可用、故割之」。『戰國策』楚策「楚國之食貴於玉、薪貴於桂、謁者難見如鬼、王難得見如天帝、今令臣食玉炊桂、因鬼見帝」(唐詩の典故となっている。別稿の「桂薪」の項に扱う)。『楚辭』の用例は第二章の各項に引用。

2 この点については別稿第三章で検討する。

3 『漢書』五行志(中之上)に載せる「成帝時謠謠」に、「桂樹華不實」とある。

4 李德裕「平泉山居草木記」(『李文饒文集』別集卷九)が、洛郊伊闕の平泉莊に蒐集した花木を列挙するなかに、「剡溪之紅桂・鍾山之月桂・曲房之山桂・永嘉之紫桂・東陽之牡桂」の名が見える。また彼には「紅桂樹」「月桂」「山桂」の題詠詩がある(全五四〇六)。なお第二章(b)項(一二二頁)参照。

5 この語の初出は突き止めていないので、あるいは唐代にすでに用例があるかもしれないが、少くとも詩には使用されていないらしい。かりに唐詩に用例が発見されたとしても、きわめて稀な例外にすぎないだろう。

6 たまたま目にとまった一例を挙げておく。范成大「探木犀」(『石湖居士詩集』卷二十一)「秋半秋香花信遲、攀枝擊葉看纖微、

昨朝尙作茶槍瘦、今雨催成粟粒肥」。唐詩の桂の幻想性は完全に消滅している。

* 本項の執筆には、『國譯本草綱目』卷三十四・牧野富太郎「牧野日本植物図鑑」・陳嶸「中國樹木分類學」・山田慶太郎「東
西交渉史上に於ける肉桂の源流（特に支那肉桂を中心として）」（同氏著『東亞香料史』所収）・B. Laufer "SINO-IRANICA"
を参照した。植物学のおよび本草学的説明はこれらの文献に就いて見られたい。なお、桂に数種があったことについては、古
籍の整理にとどまっているが、方以智『通雅』卷四十三・俞正燮『癸巳存稿』卷十一に、それぞれ考証がある。

二 唐詩における桂の〈意味〉

(a) 嘉樹・仙樹

多様に分岐する桂の詩的意味のほとんどすべてを通底する、一つの基層的心象として、「香り高き嘉樹」が抽出でき
きと思う。嘉樹とはあいまいな概念だが、プラスの幻想的価値を与えられた樹木というほどの意味である。これを
唐詩における桂の〈本義〉ということもできよう。したがって、嘉樹という項目をその他の意味の項目と同一平面に
置くことは、本来適當でない。明晰な意味というよりは、未分化の心意であり、通時的には、桂の詩史の起点である
『楚辭』「九歌」⁽¹⁾ 以来の祝祝性が、個別の詩句の成生を貫いて底流しているということになるだろう。

とはいえ、他のどの項の意味にも傾斜せず、実景として扱うには祝祝的な性格が強すぎるといった用例も存在しな
いわけではない。たとえば、高官の邸宅の一景である初唐の

2 橘花覆北沼 橘花 北沼を覆ひ

桂——唐詩におけるその〈意味〉

桂樹交西榮 桂樹 西榮に交はる

徐彥伯 擬古二首・其二

と、江南の秋景を描く中唐初期の

3 山晚桂花老 山晚れて桂花老い

江寒蘋葉衰 江寒くして蘋葉衰ふ

錢起 送萬兵曹赴廣陵

とでは、3もかなり類型的な想像裏の風景ではあるが、情景の具体性と規範の働き方に相当の径庭があることを認めないわけにいくまい。2には、

樹棲兩鴛鴦 樹には棲む兩鴛鴦

含春向我鳴 春を含み我に向って鳴く

の二句がつづき、明らかに、「古絶句」

1 南山一樹桂 南山 一樹の桂

上有雙鴛鴦 上に双鴛鴦有り

の祝祝的嘉樹像を踏襲している。公宴の詩の

4 桂華堯酒泛 桂華 堯酒泛⁽²⁾べ

松響舜琴彈 松響 舜琴を弾く

劉憲 奉和幸韋嗣立山莊侍宴應制

は桂酒の觀念が加わり、応制詩にふさわしく堯舜が持ち出されているが、基本的には「古絶句」的な嘉樹像が宮廷的に肥大し、樹木も聖代を現出するという、帝徳頌賀の意を帯びたものである。宮廷詩（特に初唐の）の桂は、おおむね同様の性格を持つといつてよい。

ただし21を、仙樹としての桂のもっとも原初的な姿をよく示している魏・曹植の「桂之樹行」

2 桂之樹桂之樹

桂の樹 桂の樹

桂生一何麗佳

桂の生ずること 一へに何ぞ麗佳なる

楊朱華而翠葉

朱華と翠葉を揚げ

流芳布天涯

流芳 天涯に布く

上有棲鸞

上には棲鸞有り

下有盤螭

下には盤螭有り

桂之樹

桂の樹

得道之仙人

得道の仙人

咸來會講仙

咸く來り會して仙を講ず

と比べれば、前者は後者の一ディテールを類型化したもので、〈仙樹〉と積極的に質を異にする〈嘉樹〉なる概念が考えにくいことがわかる。宮廷詩でも、4と、「仙」の字面を用いる

5 幽亭有仙桂

幽亭 仙桂有り

聖主萬年看

聖主 萬年看ん

桂——唐詩におけるその〈意味〉

鄭愔 奉和幸上官昭容院獻詩四首・其二

とで、祝賀の質に格別の違いがあるわけではない。次の五絶の題詠による嘉樹像

6 八樹拂丹霄 八樹 丹霄を払ひ

四時青不凋 四時 青くして凋まず

秋風何處起 秋風 何れの処にか起る

先襲最長條 先づ襲く 最長の条

雍裕之 山中桂

でも、丹霄・八樹といって、〈仙〉的要素が濃い。八樹は『山海經』海内南經の「桂林の八樹、番禺の東に在り」という八桂で、仙樹に準ずる神話的樹木である。呪祝的な嘉樹としての桂については、少くとも唐詩では、〈仙〉の色合いが修辭的に濃いか薄いかの問題しか存在しないといつてよい。

そこで仙樹であるが、この觀念が、次項に立てた脱俗・隱遁の詩的意味と連続し、重なりあうものであることはいうまでもない。

7 菱歌五湖遠 菱歌 五湖遠く

桂樹八公鄰 桂樹 八公鄰す

李頎 送喬琳

『楚辭』『招隱士』の典故と淮南王說話（↓(b)項）による典型的な修辭。喬琳は不遇のうちに長安を去ろうとしているのだが、特に仙術を学びに行くわけではあるまい。江湖の生活を江南の景物でもある桂と菱歌に代表させている

だけで、主題的には隱遁の詩句だが、隱遁が〈仙〉に直通する意識から、仙樹の觀念が被せられるのである。

詩語についていえば、仙樹としての桂をもっとも直截に表現する語に「仙桂」がある。道觀を仙宮に擬えた、

8 靈芝紫檢參差長 靈芝の紫檢 參差として長じ

仙桂丹花重疊開 仙桂の丹花 重疊として開く

駱賓王 代女道士王靈妃贈道士李榮

では、仙樹以外の要素は加わっていないが、この語が月桂・科第その他各種の詩的意味に広く用いられることは、後に見るごとくである。「丹桂」の語も、丹が花色かいなかは別として、なぜ桂が「丹い」といえば、ほとんどの場合、それが〈仙〉的色彩だから、ということと理解される。しかし、

9 家依白雲嶠 家は依る 白雲の嶠

手植丹桂叢 手づから植う 丹桂の叢

權德輿 送崔諡德致政東歸

の主題は、やはり狹義の〈仙〉というよりは、故山への退隱であり、

10 月邊丹桂落 月辺 丹桂落ち

風底白楊悲 風底 白楊悲し

顧況 義川公主挽詞

では、桂枝銷亡(e項)・月桂(f項)の要素が中心となっている。また、科第の詩にも丹桂が頻出することは、その項に説くとおりである。つまり、冒頭にいった桂の〈本義〉としての嘉樹は、かなりの範圍にわたって仙樹でもある

る、ということになるだろう。

そこで、以下、〈仙〉の觀念が比較的純粹で表出される場合のいくつかを探り上げてみよう。

まず仙界そのものに生ずる桂がある。

11 青節何由見 青節 何に由りてか見ん

三山桂自芳 三山 桂自づから芳ばしきならん

盧綸 藍溪期蕭道士探藥不至

桂花芳ばしき三山に遊んでいるので、蕭道士の持する青節を見ることができぬ、という。

12 百辟朝回閉玉除 百辟朝より回りて 玉除閉され

露風清宴桂花疏 露風の清宴 桂花疏なり

曹唐 小遊仙詩

朝見の後の仙宮で、仙帝の私宴が行われているらしい。

次は神仙、道士に配するもの。

13 八公携手五雲去 八公 手を携へて五雲に去り

空餘桂樹愁殺人 空しく桂樹を余し 人をして愁殺せしむ

李白 白毫子歌

14 因思蛻骨人 因りて思ふ 蛻骨の人の

化作飛桂仙 化して飛桂の仙(?)と作るを

孟郊 終南山下作

15 露滴梧葉鳴 露滴りて梧葉鳴り

秋風桂花發 秋風 桂花発く

中有學仙侶 中に学仙の侶あり

吹簫弄山月 簫を吹きて山月を弄す

丘丹 和韋使君秋夜見寄

桂に縁の深い歴史上の神仙は、何といっても淮南王と八公である。7では隱遁の一修辭であったが、13は神仙的人物白毫子を八公の徒に擬える。詩の冒頭二句は「淮南小山の白毫子、乃ち淮南小山の裏に在り」。14の飛桂仙は孟郊一流の造語だが、私には読めない。

道觀、祠廟の景物として桂を詠ずる例は、唐詩に頻出する。

16 獨知小山桂 独り知る 小山の桂の

尙識大羅天 尙大羅天を識しるすを

楊炯 遊廢觀

17 漸近神仙居 漸く神仙の居に近づけば

桂花溼溼 桂花 湿りて溼溼たり

于鵠 早上凌霄第六峯入紫谿禮白鶴觀祠

18 風吹青桂寒花落 風は青桂を吹きて寒花落ち

桂——唐詩におけるその〈意味〉

香繞仙壇處處聞 香は仙壇を繞りて处处に聞る

陳羽 遊洞靈觀

19 一郡皆傳此廟靈 一郡皆な伝ふ 比の廟靈ありと

廟前松桂古今青 廟前の松桂 古今に青し

韋莊 耒陽縣浮山神廟

後のものほど〈仙〉の意識が稀薄になり、19では、松桂の並置(b)項一二頁)によって森嚴さが表出されているにすぎないが、この系列のなかに置けば、やはりミニマムとはいえ〈仙〉の要素を含んで、その末端につながるという。次項に述べる脱俗・隱遁の觀念が実景へとつながる表現域が、道觀の景においても並行して現われているわけだ。5のように、宮廷詩で皇帝の所在が直ちに仙界に擬せられるのは、六朝詩以来の発想で、

20 雲車遙裔三珠樹 雲車遙裔たり 三珠樹

帳殿交陰八桂叢 帳殿交ごも陰ふ 八桂の叢

張昌宗 奉和聖製夏日遊石淙山

は則天武后の離宮の宴遊を、神仙界のこととして頌賀する諛辭。これほど露骨ではないが、

21 玉壇標八桂 玉壇 八桂標し

金井識雙桐 金井 双桐識す

盧綸 早秋望華清宮中樹因以成詠

も、八桂の語に帝室頌賀の意を込めている。

同じく帝室讚美・祝賀でも、淮南王の「王」というところに特に重点を置いて「招隠士」の典故を用いる場合がある。ここには付記しておく。

22 佩蘭長坂上　蘭を佩ぶ　長坂の上

攀桂小山前　桂を攀づ　小山の前

杜淹　寄贈齊公

秦王李世民的文学館学士だった杜が、事に坐して蜀に流される途次で、斉国公長孫無忌に贈った詩で、一聯は無忌とともに秦王に仕えた日々の追憶である。前句は曹植「公讌」の「秋蘭被長坂」の句に拠るが、この曹植の詩も五官中郎将時代の曹丕の西園の遊びを詠じたもので、二句ともに王府の遊宴に連なったという特定の意味を含む。

23 淮王愛八公　淮王　八公を愛し

携手綠雲中　手を携ふ　緑雲の中

小子添枝葉　小子　枝葉を添うし

亦攀丹桂叢　亦攀づ　丹桂の叢

李白　寄上吳王三首・其一

吳王のもとに身を寄せるに先立っての挨拶で、「添枝葉」は唐室につながる出自だという自称。攀桂はかつて王の知遇を受けたことをいうのではないか。⁽⁴⁾

帝室讚美の詩で桂が出てくるとき、離宮・山莊などが舞台になっていることが多いのは、偶然でないだろう。「招隠士」以来、桂は山中のものである。王侯の身でありながら超俗の世界に優遊する舞台として想定された山林園池に

配するに、もっともふさわしい景物が桂だった。「招隱士」の典故に拠るかぎり、どうしても次の(b)項に説く山中隱遁の要素が滲透してくるのである。

1 「九歌」の桂は多く「桂」型の詩語に用いられ、材料として酒・舟・旗・建物などを修飾する。別稿「材料」の項に闕説する予定であるが、二例を挙げれば、「蕙肴蒸兮蘭藉、奠桂酒兮椒漿」(「東皇太一」)「沛吾乘兮桂舟、令沅湘兮無波、使江水兮安流」(「湘君」)。さらに、成立はやや降るであろうが、祝祝的な聖樹の性格をよく示す「遠遊」の「嘉南州之炎德兮、麗桂樹之冬榮」を挙げておく。

2 この訓みはやや確信を欠くが、一句の意味としては、眼前の桂花が散って酒杯に浮ぶ、ということ、桂と酒を縁語として取り合わせている、と解しておく。なお同巧の詩句に中宗「九月九日幸臨渭亭登高得秋字」(全二三)「泛桂迎尊滿、吹花向酒浮」がある。

3 この詩は『文苑英華』巻二四九に収め、詩題も同書に同じ。詩中に「頽衣登蜀道」の句があり、作詩事情は明らかだが、淹が事に坐して蜀に流されたのは高祖の武徳八年(『舊唐書』本傳)、一方長孫無忌が齊国公に封ぜられたのは貞觀元年であるから、詩題の「齊公」は、少くとも作詩時の語ではない。なお、「小山桂」と「長坂蘭」の対は、他に玄宗「巡省途次上黨舊宮賦」(全四〇)「小山秋桂馥、長坂舊蘭叢」、岑參「威王挽歌」(全二〇九三)「幽山悲舊桂、長坂慘餘蘭」があり、いずれも王にかかわる修辭(玄宗の詩は、臨淄郡王時代に潞州別駕として滞在した旧邸を訪れた時の作)。

4 引用の部分に続いて、「謬以詞賦重、而將枚馬同、何日背淮水、東之觀土風」という。

(b) 隱遁・脱俗

唐詩の桂に最大の影響を与えた典故は、『楚辭』「招隱士」のそれで、多少ともこの典故を意識している詩句は、桂の全用例の三・四割に達するだろう。

冒頭の二句

桂樹叢生兮山之幽　　桂樹叢生す　山の幽なるに

偃蹇連蜺兮枝相繚　　偃蹇連蜺として枝相繚まとふ

と、篇中に二回繰り返される

攀援桂枝兮聊淹留　　桂枝を攀援して聊か淹留す

が桂に直接言及する部分であるが、

山氣籠從兮石嵯峨　　山氣籠從として石嵯峨たり

谿谷嶄巖兮水曾波　　谿谷嶄巖として水波を曾かさぬ

及び

歲暮兮不自聊

歲暮れて自ら聊たのしまず

の詞章も、前者は桂が巖石と、後者は歲暮と結びつくのに影響しているだろう。また、王逸の付した序に「招隱士は淮南小山の作。淮南王の徳を慕って集った八公の徒らが造った辭賦を分類して、小山・大山と称した」という解説、及び、淮南王が仙人であった八公の手びきで彼らとともに升仙したと伝える説話(1)も、右の詞章と結合して、かなり有力な修辭の源泉となった。

ところで、「招隱士」は、本来は山中に遊んで帰らぬ「王孫」を招き返す「招魂」系の辭賦であり、王逸はこの王孫を屈原として著しく儒教的な解釈を加えているのだが、六朝詩以降、ほとんど隱遁脱俗の境地を価値あるものとする立場で用いられ、隱士に山中から出ることを呼びかけるという原義を承けることは、きわめて稀であるといつてよ(2)

い。陸機・左思等の「招隱詩」が隱者を求め尋ねる詩であるのと一般である。

この典故は唐詩に使用される隱遁脱俗の典故のなかでも、おそらくもっとも頻度の高いもので、隱遁をめぐるあらゆる情況に適用される。まず、作者と隱者あるいは隱者たるべき人物との關係に従って、その二三を挙げてみよう。

24 寂寂寥寥揚子居 寂寂寥寥たり揚子の居

年年歲歲一牀書 年年歲歲一牀の書

獨有南山桂花發 獨り南山の桂花の発くあり

飛來飛去襲人裾 飛び去り飛び来って人の裾を襲ふ

盧照鄰 長安古意

は、歴史上の隱者に対して用いた例。隱士の代表たる揚雄に桂花を配したについては、直接の言及はないが、「招隱士」への連想が働いている。「南山」というのは、終南山が神仙・隱者の住所と考えられていたためであらうが、字面としては、前出1の「古絶句」が響いているのではないか。なお、隱士の身に桂花が飛来するというイメージは、類例のないものである。

この詩で揚雄を出したのは、時代設定を漢代としたためであり、暗に作者自らが投影されているのだが、より直接自己をめぐる情況を述べるのが普通であるのは、いうまでもない。

25 誓息蘭臺策 誓ひて蘭台の策を息め

將從桂樹遊 將に桂樹の遊に従はん

因書謝親愛 書に因りて親愛に謝す

千歲覓蓬丘　　千歲　蓬丘を覓めん

陳子昂　入峭峽安居溪

26 歸來儻有問　　歸來　儻し問ふこと有れば

桂樹山之幽　　桂樹　山の幽なるにあり

李白　禪房懷友人岑倫

27 桂樹花應發　　桂樹　花応に発くべし

因行寄一攀　　行に因りて一攀を寄せん

劉長卿　送鄭十二還廬山別業

28 至今高風在　　今に至るも高風在りて

爲君吹桂枝　　君が為に桂枝を吹く

皎然　答裴濟從事

25は仕官への執着を棄てて仙界に憧れ、26は遠方の友が帰るころ、己れの所在は山中にあるだろうと告げる。27は山中に帰る友に向って、自分も隠棲の志があることを桂樹に告げてくれ、というのだろう。28は出山を誘う友に、君の山荘ではあい変わらず清風が吹いているよ、という皮肉である。

これらは代表的な情況のなから数例を挙げたにすぎないが、こうした隠遁をめぐる人間関係の種類よりも、唐詩における桂という景物の性格を考える上でより重要なのは、隠遁の対極にある政治世界からの距離の遠近だろう。

表現と現実とは別次元に属するから、詩のことばかりこの距離の実情を測ることは必ずしも容易でないが、憧憬の語

であるにせよ、25の陳子昂のように、桂樹を仙界にまで遠隔化している例はむしろ稀である。方向はそれぞれ逆だが、27 28のような呼び掛けがごく普通であることは、唐詩人にとって桂樹に象徴される隱遁空間が、政治世界に対するもう一つの日常の場として、相互に往還可能な位相にあったことをものごとがたっている。達すれば兼善、窮すれば独善という、濟世と隱遁が相補的なエトスが、大方の唐詩人に共通するものであったから、これは当然で、

29 誰問烏臺客 誰か問はん烏台の客の

家山憶桂叢 家山 桂叢を憶ふを⁽⁴⁾

羊士諤 和寶吏部雪中寓直

30 歸心不可留 歸心 留む可からず

雪桂一叢秋 雪桂 一叢秋なり

楊凌 潤州水棲

のごとく、桂樹に托される情況が家郷への退休であるというのも、ごく当り前のことだった。

31 人事傷轉蓬 人事 轉蓬を傷む

吾將守桂叢 吾將に桂叢を守らん

杜甫 自瀼西荆扉且移居東屯茅屋四首 其一

夔州の杜甫が守ろうとする桂叢とは、放浪の身に訪れた一時の安定であり、南方僻遠の地という含みはあるかもしれないが、平静な日常であるには違いない。同じく轉蓬に桂を対置した

32 有喜留攀桂 留まりて桂を攀づることを喜ぶ有り

無勞問轉蓬 　　転蓬を問はるるを勞はす無し

杜甫 上巳日徐司錄林園宴集

は江陵での作らしいが、この攀桂はさらに短期の滞留のうちに得られた閑適である。次の二例もほぼ同様の情況。

33 復作淮南客 　　復た淮南の客と作り

因逢桂樹留 　　因りて桂樹の留むるに逢はん

李白 寄淮南友人

34 殷勤陽羨桂 　　殷勤にす 陽羨の桂

別此幾時攀 　　此に別れて幾時か攀ぢん

耿漳 常州留別

32・33・34の桂は、あるいは徐司錄・友人の人柄の比喻（C項）となっているかもしれないが、それぞれの土地で自由な離俗の時を過す（した）という意を含むことは間違いない。⁽⁵⁾淮南の地名から、淮南王↓桂の連想を引き出している李白にしたところで、ここですたとえば仙術の修業を行うというところまで意味させているとは受け取りにくい。右に列挙したどの例をとっても、桂樹の在りかは、俗世の日常から絶對的に隔絶した山中というわけではなかったが、さらに、

35 身倚白石崖 　　身は倚る白石の崖

手攀青桂枝 　　手は攀づ青桂の枝

白居易 山中獨吟

桂——唐詩におけるその〈意味〉

は廬⁽⁶⁾山草堂の作で、貶謫による閑職の身が山林に親しむ機会を与えているには違いないが、白居易は江州司馬なのであって、官僚生活から離脱しきっているわけではない。

36 濃翠生苔點 濃翠 苔点生じ

辛香發桂叢 辛香 桂叢より発す

姚合 寄題尉遲少卿郊居

尉遲少卿は東都分司、郊居とは洛陽郊外の別業である。⁽⁷⁾ たかだか休沐の日の閑適という程度のことだが、それでも桂叢の語に「招隱士」への連想が働いていないとはいえないだろう。

37 城隅一分手 城隅 一たび手を分つ

幾日還相見 幾日にして還相見ん

山中有桂花 山中 桂花有り

莫待花如霰 待つ莫れ 花霰の如くなるを

王維 崔九弟欲往南山馬上口號與別

の崔九も、恐らく休沐の日を終南の別墅にしばしの清閑を楽しむに出掛けるのであること、作者の輞川莊におけると同様であろう。

このように、官僚生活の日常にどこまでも接近する一方で、25の陳子昂や、
38 相思在何處 相思 何処に在りや

桂樹青雲端 桂樹 青雲の端

李白 贈參寥子

のように、少くとも表現の次元においては相當に「純粹」な求仙・隱遁への志向が語られる。先に仙樹の項に引いた13・14・15・17・18なども、これらと同類に属する。つまり、図式化するなら、求仙・隱遁・退休・閑適といった順序で次第に官僚生活⇨利祿の俗世に接近する、一連の脱俗の意識の遠近法が、「招隱士」の典故が持つ表現域の広がりに対応しているのである。

もう一点注意しておくべきは、この典故の表現域のもう一つの側面をなす觀念から実景に至るはばの存在である。

前掲の詩句に例をとれば36姚合の苔點と對に置かれた桂叢が、他の詩句に比較して著しく觀念性が希薄で、実景的であることは明瞭だろう。これは、26・25・26・27・29・33・34・38などが、古詩と近体の別はあれ、すべて作者の感慨を盛り込んで一篇を収める末尾の二句であるのに対して、この二句が八韻の五排律の腹聯の一つで、〈景〉の聯であることによる当然の結果なのだが、なおかつ、桂叢という「招隱士」中の字面から作られた詩語を使用することによって、隱遁の觀念への連想を潜在させていた。

39 孤歌倚桂巖 孤歌 桂巖に倚り

晚酒眠松塢 晚酒 松塢に眠る

杜牧 題池州弄水亭

長篇の五言古詩中の句。地方と洛陽、自と他の別はあれ、官僚生活のなかでの閑適という点で、36姚合とはほぼ同様の情況であり、実景の要素の在り方もよく似ている。「巖」はやはり「招隱士」中の字面であり、さらに直前に「小山石稜を浸す」の句があつて、典故への連想がいくらか濃くなっているといえるかもしれない。それと、桂と松の對は、

桂と苔に比べればより規範的であることを免れず、その分だけ実景の一回性が後退し、閑適が觀念化される結果をもたらしている。

ここで松と桂の対置、及び「松桂」という詩語について一言しておく。この語は桂のさまざまな詩的意味に広く用いられる、桂の並列構造の詩語のうちではもっとも使用頻度の高いことばであって、詳しい説明は別稿に譲らねばならないが、両者の取り合わせが、觀念から実景へとわたる桂の表現域において重要な役割りを果している点は、ここで指摘しておく必要がある。

40 十年居此溪 十年此の溪に居り

松桂日蒼蒼 松桂 日に蒼蒼たり

自從無住人 住人無くなりし自從り

山中不輝光 山中輝光せず

王建 山中寄及第故人

41 石泉淙淙若風雨 石泉淙淙として風雨の若し

桂花松子常滿地 桂花松子常に地に滿つ

高適 賦得還山吟送沈四山人

42 雨滌莓苔綠 雨は莓苔を滌つて緑に

風搖松桂香 風は松桂を揺らして香ばし

司空曙 過終南柳處士

43 半夜尋幽上四明 半夜 幽を尋ねて四明に上る

手攀松桂觸雲行 手に松桂を攀ぢ 雲に触れて行く

施肩吾 同諸隱者夜登四明山

後のものほど実景性・矚目性が濃くなるように並べてみた。先の39杜牧は41の後、前項に引いた19韋莊は42の前後あたりに位置しようか。勁さと香氣という対照的な属性を帯びるこの二種の嘉樹の配合が、脱俗の意識を觀念から実体へ、情から景へと媒介する景物として、よく機能しているさまが見て取れるであらう。

もちろん実景性は他の草木との対・並置によってのみもたらされるわけではない。37王維では、はなはだ単純な、そして六朝詩に先例のある表現ながら、「⁽⁹⁾蔽の如く」散る桂花という直喩が、想像裏の山中の景を鮮かなイメージとして出現させている。ここでは、「招隱士」の典故は潜在的に働いているのみだといえるかもしれない。そして、同じ詩人の

44 人閒桂花落 人閒にして 桂花落ち

夜靜春山空 夜靜かにして 春山空し

月出驚山鳥 月出でて 山鳥を驚かし

時鳴春澗中 時に鳴く 春澗の中

王維 皇甫岳雲谿雜題五首 鳥鳴磎

の渾然たる自然像に至って、一回的な經驗の鮮明さは、ほとんど典故の引用を憚らせるものがあるだろう。⁽¹⁰⁾とはいえ、ここにも、あの王孫を淹留させた桂叢の香りを嗅ぎとることは可能でもあり、この詩の十全な理解にとって必要でも

あるはずだ。

もっとも、この「鳥鳴磧」のように自然像のみで完結した詩というのは、唐詩（のみならず一般に中国古典詩）では例外であって、序章に述べたように情の句と景の句の均衡・融合が一篇の叙情を構成するというのが、唐詩の通常の詩法である。39 以下の引用例も、ほとんどがそうした展開をとる詩中で、景に傾いた句であった。景としての桂を論ずることは別稿の課題とするが、一篇のなかでの桂の句の在り方、及び、隱遁・脱俗の主題と他の諸要素との結合の仕方を見るため、改めて初・盛・中・晩から一例ずつを引いてみよう。

45 香吹分巖桂 香吹 巖桂を分かち

鮮雲抱石蓮 鮮雲 石蓮を抱く⁽¹⁾

駱賓王 秋日山行簡梁大官

秋と香氣は、桂のイメージの自然的側面に関わる諸要素のうち、もっとも主要なものであり、右の句もそこに重点を置いて、初唐詩としてはかなり水準の高い感覚像となっているのだが、この一聯は八韻の五排律の第四聯で、山川の景をつらねる詩の前半部の最後におかれたもの。第五聯

地偏心易遠 地偏なれば 心遠たり易く

致默體逾玄 致黙して 体逾いよ玄なり

以下は情に移って、

不如從四皓 如かず四皓に従ひ

丘中鳴一弦 丘中に一弦を鳴らさんには

と、隱遁への希求を祈べて終る。他の草木との対句のつねとして、桂独自の意味性は弱められているが、山川の景を隱遁の情に受け渡す位置にあって、「巖桂」の像がよく働いているといえるだろう。

46 久臥青山雲 久しく青山の雲に臥し

遂爲青山客 遂に青山の客と爲る

(中 略)

素心自此得 素心 此自り得

眞趣非外借 眞趣 外に借るに非ず

颺啼桂方秋 颺鳴いて 桂方に秋なり

風滅籟歸寂 風滅して 籟寂に帰す

緬思洪崖術 緬はなかに洪崖の術を思ふも

欲往滄海隔 往かんと欲すれば滄海隔つ

雲車來何遲 雲車 來ること何ぞ遅き

撫己空嘆息 己れを撫して空しく嘆息す

李白 日夕山中忽然有懷

山中で自己の本来性を獲得しながら、仙界は至りたいと歎く五言古詩の一節で、李白の桂の詩句中、もっとも臨場感の強いもの。秋・香氣・山中・南方は、景としての桂の像に関わる四大要素といえるが、この一句には、たぶんそのすべてが混在している(宋本の「廬山」という題下注を信じるなら、たんに南方ということでなく、むしろ桂の名

產地廬山という觀念を挙げるべきかもしれない。そのような含みを持った景として、自らの内に「真趣」を得た欲びと、仙界の遙かさへの歎きとの中間に、夜のしじまに響く鋭い音と、漂う芳烈な香りが、確かな位置を占めている。

47 晨趨禁掖暮郊園 晨は禁掖に趨りて 暮は郊園

松桂蒼蒼煙露繁 松桂蒼蒼として 煙露繁し

明月上時羣動息 明月上る時 羣動息み

雪峯高處正當軒 雪峯高き処 正に軒に當る

武元衡 郊居寓目偶題

休沐の日の閑適を詠じて典型的な七絶。郊園はおそらく終南に近く、秦嶺の高峯に早い雪が置く晩秋であろう。官場に生きた唐詩人にとっての自然が持つ意味を絵に画いたような詩であり、松桂の語がこういう場所にきわめて嵌まりがよい（少々よすぎるぐらいだが）のは、二種の並置が双方の屬性を中和して、この語を隠遁への傾斜を半ば含んだ山林一般の象徴たらしめているからである。

48 茂苑樓臺低檻外 茂苑の樓台 檻外に低く

太湖魚鳥徹池中 太湖の魚鳥 池中に徹す

蕭疏桂影移茶具 蕭疏たる桂影 茶具に移り

狼籍蘋花上釣筒 狼籍たる蘋花 釣筒に上る

皮日休 褚家林亭

七律の頷・頸二聯。中・晩唐詩に頻見する江南（この詩では蘇州）の林園の景。頷聯の遠景に対して、頸聯は近景の

トリヴィアルな描字に興味の中心が置かれており、桂は矚目の一点景にすぎないが、両句無人の閑寂を写し、時のたつままに茶具の上に動く桂樹の影は、やはり尾聯に

爭得共君來此住 爭でか君と共に此に來りて住み

便披鶴氅對清風 便ち鶴氅を披て清風に對するを得ん

という離塵の願いに適わしい景物として扱ばれている（もちろん蘋花とともに江南の景物という要素も加わっている）。

实景に脱俗の気分を流しこむ景物としての桂の性格を見るには、この程度の挙例で十分だろう。ただ、一般の山林の景のほかに、特に一言しておくべきだと思われるのは、道観と寺院の場合がある。前者については(a)項で触れておいたのでここでは省略するが、寺院の景として、あるいは僧侶に配して桂を詠み込んだ詩句は、道観・道士の場合に劣らず頻出し、その内容も仏道の間にほとんど異なるところがない。唐詩人の宗教観（あるいは宗教感覚）に通常隱遁的趣味性が濃厚で、思想としての儒教・生活として官場と矛盾なく共存するものであったこと、そうした立場からする仏道の受け取り方にほとんど差が見られないこと、などは、津田左右吉⁽¹²⁾以来の定論といってよい。桂は一個の景物においてよくこの事実を立証するものといえる。むしろ寺院も道観とともに山中にあって、詩人の逸興を誘う場所であることが多かった。

49 獨坐巖之曲 独り巖の曲に坐せば

悠然無俗紛 悠然として俗紛無し

酌酒呈丹桂 酒を酌んで丹桂に呈し

桂——唐詩におけるその〈意味〉

思詩贈白雲 詩を思ひて白雲に贈る

盧照鄰 赤谷安禪師塔

50 桂花寥寥閒自落 桂花寥寥として閒自に落ち

流水無心西復東 流水無心にして西復た東

劉長卿 長沙贈衡岳祝融峯般若禪師

51 桂樹芳陰在 桂樹 芳陰在り

還期歲晏歸 還た歲晏に帰せんことを期す

溫庭筠 題中南佛塔寺

中・晚唐詩では、ここでも松桂の取り合わせがきわめて多く、寺院の景の常套という感が強い（道観の場合も同様）。

52 松桂亂無行 松桂 乱れて行無く

四時鬱芊芊 四時 鬱芊芊たり

白居易 遊悟真寺詩一百三十韻

53 雨過一蟬噪 雨過ぎて一蟬噪がしく

飄蕭松桂秋 飄蕭として松桂秋なり

杜牧 題揚州禪智寺

54 銅池數滴桂上雨 銅池數滴 桂上の雨

金鐸一聲松杪風 金鐸一声 松杪の風

皮日休 開元寺客省早景卽事

なお、この類の桂を比喻として見た場合の性格——比喻される内容との関係にも論すべき点があるが、これについては次の人格・才能の項で触れることにする。

以上(a)(b)二項で、「招隱士」の典故を軸として、仙樹から山林閑適の実景のあいだに展開する、唐詩の桂樹像の中心的な領域を一通り見渡してきたが、そのはば広さと、用例の豊富さからして、この種の桂について考えることは、ほとんど唐詩における隱遁・脱俗の意識の在り方を問うことに他ならないという感が深い。こういう大問題に立ち向う用意はないし、ことに六朝詩以降の詩史的展望なしにこれ以上何かをいうのは無理なのだが、別稿に向けての一つの予断として、若干の発言を加えておきたい。

桂に象徴される唐詩の隱遁空間が、政治||官場から往還可能なもう一つの日常であり、仙界から都城郊外の別墅に至るまで連続していることを述べたが、これを逆にいえば、唐詩人の脱俗の意識の遠近法が、その連続のはばにそのまま対応しうる詩的等価物として、桂という一個の景物を呼び求めた、ということになるだろう。

桂という景物の顕著な特徴として、幻想の極限に仙樹というところまでを含みながら、同時にどこの山林にも見られる(南方という地理への傾斜は伴うが)樹木だという点を挙げることができる。さればこそ、桂を点出することによって、たとえば皇帝の臨御する園林や、たまたま杖を曳いた寺院道観の実景を、そのまま仙界へ向けて昇華させることが可能になるのだ。唐詩に登場する仙木の種類はなかなか賑やかで、思いつくままに挙げて、扶桑・若木・丹木・建木・三珠樹・玉樹・瑤樹などがあるが、『山海經』・『淮南子』⁽¹⁴⁾ 墜形訓などに記載されるこれらの樹木は、所在

からして仙界あるいは神話的境域に生じる、文字どおりの仙木であって、現実の樹木をこれらに見立てることはあっても、現実の樹木を指すこととは同時に〈仙〉的な含みを持つという桂とは、事情を異にする。こういう独特な性格を持つ樹木というのは、おそらく他には見当たらない。

この点に関連して、桃花源と桂樹の下の隠遁とを対比した、次のような詩句が見出されるのは、はなはだ示唆的である。

55 桃源迷處所 桃源 処所に迷ふ

桂樹可淹留 桂樹 淹留す可し

盧照鄰 過東山谷口

56 方從桂樹隱 方に桂樹の隱に従ひ

不羨桃花源 桃花源を羨まず

李白 聞丹丘子於城北山營石門幽居

57 桃花迷聖代 桃花 聖代に迷ひ

桂樹狎幽人 桂樹 幽人に狎る

劉長卿 酬滁州李十六使君見贈

55・57では主体が自己、56では他者であるが、求めて得られぬ桃花源に対して、いずれも現実の山中に獲得しうる隠棲の地を桂樹によって象徴させている。ことに、55・57では桂樹を次善のものとする建て前で桃源と対比している（57はおそらく55に学んだ上で、乱世ならぬ聖代だから桃源は存在したい、といっているらしい）のに対して、56

ではむしろ積極的に桂樹の隠の方を押し出している。桃源にしたところで、絶対的彼岸とはいえないが、意図的探索の前には消え失せるほかない人外境であることは確かだ。これに對して、桂樹香る山中であれば、利祿の俗世を一步踏み出そうと心懸けるなら、直ちに現前する脱俗空間なのだった。⁽¹⁵⁾ そういう場所が得られるなら、何も桃花源まで出掛けることはないという李白のことは、丹丘子への讚美による誇張が含まれているとしても、求仙の情熱が強かった詩人のものだけに意味深いものがあるだろう。

しかしながら、いかに俗世から一步のところとはいえ、王孫が遊んで帰らなかった昔から、桂樹の生ずるところは官界の日常とは一線を画した山中のものであり、それ故に、官僚生活の合い間につかまれた閑適の時間にも、山林の逸趣を添える景物たりえた。高官の山莊の例をもう一つ挙げてみよう。洛陽伊闕の平泉山莊に夥しい奇花珍木を集めた李德裕⁽¹⁶⁾の貴族趣味は、大方の唐詩人にとって手のとどかぬものだったろうが、その花木の数に加えられた数種の桂を題詠したなかで、たとえば

58 吾愛山中樹 吾は愛す 山中の樹

繁英滿目鮮 繁英 満目に鮮かなり

(中略)

豈知幽獨客 豈知らんや 幽独の客の

頼此當朱弦 此に頼りて朱弦に当つるを

李德裕 春暮思平泉雜詠二十首・山桂

とうたうとき、そこに托された脱俗の感覚は、ごく平均的な質のものである。山林の日常化は日常の山林化と照応し

ているわけで、これは、唐詩人にとって、隱遁・脱俗の場がまず第一に官場から然るべき距離を保った山中という空間に想定されていたことの結果に他ならない。

もちろん唐詩人にも、もう一つの脱俗の場として、田園というものがあつた。唐初に王績以降、王維・孟浩然・儲光儀・白居易など、田園に魂の憩いを求めるといった種類の詩を残した詩人は少くない。そこでは「淳朴」な農民との交流がうたわれもする。すなわち、〈自然〉のみならず〈自然〉と抱擁しあつた〈社会〉も、唐詩人の脱俗の意識に一つの位置を占めていた。しかし、少くとも量的に見る限り、官場からの脱出先きを山中に求めるといふ態度に比重がかかることは否定できないと思う。田園詩を書いた上記の詩人たちの場合でも、例外なく〈山〉への志向を語る詩が共存している。隠棲の場である下邳渭村の田園が、一方ではきびしい生産と収奪の場でもあることをよく看取っている白居易の姿勢は、唐詩人のなかでは異色あるものといつてよいが、その彼が、同じ時期に藍田の悟真寺に遊んで52「遊悟真詩一百三十韻」の大長篇に山寺の景を賞美し、自ら「我本より山中の人」と称してこの山中への隠遁を強く希求しているのは、田園だけでは収まらぬ唐詩人の〈山〉への志向を物語る好例である。より貴族的な王維や李徳裕になると、その輞川荘・平泉荘では、田園は山林と連統的に並存しているといった趣きが濃い。

要するに平均的唐詩人の隠遁・脱俗の意識は、官界の俗塵に隣接しながら一步を隔てた、〈山〉の現実性と幻想性、日常性と非日常性の均衡の上に成立していた。これがどこまで唐詩に固有のものであるか、確言できるほどの詩史的見通しを私は持ち合わせていない。ただ、時間のスケールをはなはだ大きく取った、かつまことに漠然たる印象にすぎないが、このような唐詩の〈山〉は、左思・陸機の「招隱士」・郭璞の「遊仙詩」などに描かれた魏晉の隠者の棲む、世俗の現実から隔絶した幻想性を持つ〈山〉と、隠遁というよりはむしろ家居退休の場というべきだろうが、堅

牢な安定性を具えた生活基盤である宋詩の田園との、中間に位置しているような気がする。⁽¹⁷⁾ 観念から実景にわたる隠遁・脱俗の景物として、唐詩人が桂をこよなく愛好したのは、彼らの〈山〉のこの独自の位相によるものではないだろうか。⁽¹⁸⁾

- 1 『太平廣記』卷八「劉安」条に「神仙傳に出づ」として引くもの（十卷本『神仙傳』卷四はこの転載）がもっとも詳しい。
- 2 科第の項に引く146は、その稀な一例といえるかもしれない。
- 3 前野直彬「終南山」（『文哲文学会報』一九八一年第六号）
- 4 羊士諤は監察御史の職についたことがある（『舊唐書』李吉甫傳）から、烏台客は作者自身のことであろう。なお、雪中寓直の詩に桂を出したのは、雪—白—桂花の連想による。
- 5 耿湊が常州に赴いたのは、大暦八年—十年頃、括図書使として江淮に派遣された時のことであるらしい（傅璇琮『唐代詩人叢考』「耿湊考」）。そうとすれば、自由な処士の身ではなく、官命出張の途次ということになる。
- 6 廬山は桂の産地として聞えていた（別稿）。白居易には「廬山桂」（全四六七〇・別二六、「潯陽三題」の一）の作もある。
- 7 『廬山記』（『藝文類聚』卷八十九桂条所引）の「山有三石梁、廣不盈尺、俯盼者太平御覽九百五十七作杳然無底、吳猛將弟子過此梁見老翁坐桂樹下、以玉盃甘露與猛」は、唐詩の注家によってしばしば引用される記事である。
- 8 首聯に「卿仕在關東、林居思不窮」という。姚合は「和裴令公新成綠野堂即事」（全五六九四）の「曙雨新苔色、秋風長桂聲」でも、苔と桂を対にしているが、これも洛陽午橋の裴度の莊中の景である。
- 9 前出19もその例。
- 10 趙殿成は、梁元帝「春別應令四首」其一（『全梁詩』九六五）「上林朝花色如霰」と柳惲「獨不見」（『全梁詩』一〇八五）「春花落如霰」を引く。
- 11 特に、この詩の桂は通常の秋ではなく、春山に咲いているだけに、一回性が強い。なお、桂の開花期については別稿に述べる予定。

- 11 前句の訓みは確信を欠くが、風に吹かれて巖桂の香りが分散する、の意に取っておく。後句は明らかに謝靈運「過始寧墅」の「白雲抱幽石」に学んだもの。
- 12 数量としては、道観・道士より仏寺・僧侶に配した用例の方がかなり上廻っている。
- 13 「唐詩にあらはれてゐる佛教と道教」（『津田左右吉全集』第十九卷）。
- 14 『山海經』には扶桑（海外東經）・榑木（東山經）・扶木（大荒東經）・若木（大荒北經・海内經）・丹木（西山經）・建木（海内南經・海内經）・三珠樹（海外南經）が、『淮南子』墜形訓には榑桑・扶木・若木・建木・三珠樹・玉樹・瑤樹が見える。この他、扶桑・若木は『楚辭』など記載する書は多いが略す。
- 15 ただし盧照鄰の詩では、隱棲の場所を描くのに「跡異人間俗、禽同海上鷗」「野老堪成鶴、山神或化鳩」などの仙界的幻想をつらねた末、「不辨秦將漢、寧知春與秋」と、桃源と交らぬ状態を持ち出しており、情況をより現実的にうたう李白・劉長卿との時代の差を感じさせる。
- 16 一の三注（4）。
- 17 謝靈運以降の六朝詩の山と隱遁の關係はどうなのか、という問いが当然提出されるだろう。いま答える用意はないが、史的跡づけを別稿に廻したため敢えて触れなかった古詩における隱遁の桂の發生が意外に新らしく、明瞭にこの性格を帯びた例が沈約「直學省愁臥」（『文選』卷三十一「全樂詩」一〇〇七）の「山中有桂樹、歲暮可言歸」、吳均「山中雜詩三首、其二」（『全樂詩』一三八）の「山中自有宅、桂樹籠青雲」など、五、六世紀の交あたりには始まるらしいのは、山水詩の展開とあるいは関連するところがあるかもしれない。さらに、唐詩の田園と宋詩の山、及び宋詩の桂の性格を明らかにしなければならぬだろう。今後の課題である。
- 18 ここでは「山」の距離という点しか取り上げなかったが、香り高き樹木という「本義」の側面が、より根本的な問題として残る。人格・才能の（〇）項にも共通する問題であるが、たとえば宋詩におけるエトスの象徴たる梅との比較が考えられなければならない。

(c) 人格・才能

人物の性情・道德・志操・文才など、人間的素質の比喩。当然、他者への称讃と己れへの自負の双方を含む。

桂にこの種の意味を与えることは、「九歌」の桂の呪術性が倫理性に転じた「離騷」の

雜申椒與菌桂

申椒と菌桂とを雜⁽¹⁾ふ

豈維^{なだ}紉夫蕙

豈維^{なだ}夫の蕙^ひを紉^{つな}ぐのみならんや⁽²⁾

矯菌桂以紉蕙兮

菌桂を矯めて以つて蕙を紉⁽²⁾ぎ

索胡繩之纒纒

胡繩の纒^な纒⁽³⁾たるを索にす

に始まる。後世への影響という点では、美人香草の比喩論に立って、この「離騷」の詞章のみならず、「九歌・湘君」の「沛として吾桂舟に乗る」に「吾は屈原自らを謂へるなり、言ふところは、己湖沢の中に在りと雖も、猶桂木の船に乗りて、沛然として行き、常に香浄たるなり」とか、「招隱士」の「桂樹叢生兮」に「桂叢は芳香にして、以って屈原の忠貞を興するなり」、「山之幽」に「遠く朝廷を去りて隠蔽するなり」などと注する、王逸の『章句』をも挙げべきだろう。特に「招隱士」の王逸注は、屈原を朝廷に容れられぬ隱君子の理想型として描き出すことによって、この種の桂の意味に原型を提供した。

六朝詩から三例を挙げる。

3 君不垂簷

君 簷を垂れざるも

豈云其誠

豈^{ねが}はくは其の誠を云べん

桂——唐詩におけるその〈意味〉

秋蘭可喻 秋蘭 喻ふべく

桂樹冬榮 桂樹 冬榮はなさく

魏・曹植 朔風詩

4 蒼蒼山中桂 蒼蒼たり山中の桂

團團霜露色 团团たる霜露の色

霜露一何緊 霜露 一へに何ぞ緊しき

桂枝生自直 桂枝 生ひて自ら直し

梁・江淹 雜體三十首 劉文學感懷

5 可憐桂樹枝 憐れむ可し 桂樹の枝

懷芳君不知 芳を懷くも 君知らず

摧折寒山裏 寒山の裏に摧折し

遂死無人窺 死を遂ぐるも 人の窺ふなし

梁・吳均 傷友

六朝詩の用例について、一、仙樹と並んで建安期に遡ること（隱遁の桂よりはるかに早い）。二、香りの高さだけでなく、歳晩に花咲く（あるいは常緑の色を変えぬ）という性質が、比喩を成立させる大きな要件になっていること。三、逆に、それにもかかわらず、寒さに傷つけられるというイメージが、士不遇の喩となること（別項に立てた「桂枝銷亡」の主題につながる）。四、蘭との配合という慣用の修辭が、この主題において詩に定着したと考えられるこ

と、などを指摘しておこう。

唐詩に移って、まず題詠の詩から典型的な例として、

59 桂樹何蒼蒼 桂樹 何ぞ蒼蒼たる

秋來花更芳 秋來 花更に芳ばし

自言歲寒性 自ら言ふ 歲寒の性

不知露與霜 露と霜とを知らずと

幽人重其德 幽人 其の徳を重んじ

徙植臨前堂 徙植して前堂に臨ましむ

連拳八九樹 連拳たる八九樹

偃蹇二三行 偃蹇たる二三行

枝枝自相糾 枝枝 自から相糾ひ

葉葉還相當 葉葉 還た相當る

去來雙鴻鵠 去來す 双鴻鵠

栖息兩鴛鴦 棲息す 兩鴛鴦

榮蔭誠不厚 榮蔭 誠に厚からざるも

斤斧亦勿傷 斤斧 亦た傷つること勿れ

赤心許君時 赤心 君に許すの時

桂——唐詩におけるその〈意味〉

此意那可忘 此の意 那ぞ忘る可けんや

王績 古意六首・其五

60 世人種桃李 世人 桃李を植うるは

多在金張門 多く金張の門に在り

攀折爭捷徑 攀折 捷徑を争ひ

及此春風暄 此の春風の暄かきに及ぶ

一朝天霜下 一朝 天霜下れば

榮耀難久存 榮耀 久しく存し難し

安知南山桂 安んぞ知らん 南山の桂の

綠葉垂芳根 綠葉 芳根に垂るるを

清陰亦可託 清陰 亦た託す可し

何惜樹君園 何ぞ惜しまん 君の園に樹うるを

李白 詠桂

などを挙げることができる。士の出処・節義という倫理的主題を正面から詠じ、比喻の性質はまことに直接的。六朝詩についていった(二)に重点がかかっていることは、いうまでもない。意図して古風を狙った59では、(a)項に言及した嘉樹の類型的形象がこの倫理的主題に結びつけられていて興味深い。なお「赤心」は「幹の心が赤い」との双関であろう。

61 窮冬百草死 窮冬 百草死し

幽桂乃芬芳 幽桂 乃ち芬芳たり

韓愈 重雲一首李觀疾贈之

は、右の王・李二家の詩を二句に短縮したような、もっとも類型的な例。

62 一言芬若桂 一言 芬り桂の若く

四海臭如蘭 四海 臭り蘭の如し

駱賓王 詠懷

63 慷慨傳丹桂 慷慨 丹桂を伝へ

艱難保舊居 艱難 旧居を保つ

羅隱 寄蘇拾遺

64 蒼蒼松桂姿 蒼蒼たる松桂の姿

想在掖垣中 掖垣の中に在るを想ふ

韋應物 寄中書劉舍人

桂によって喻られるものは、62では友情を誓うことば、63では王朝への忠誠心で、題下に「拾遺は許公（蘇頌）の後にして、今も猶開元中の旧第に居る」の注がある。64では、内なる倫理が外に表われた風采が「松桂の姿」であろう。

65 慷慨嗣眞作 慷慨す 嗣眞の作

桂——唐詩におけるその〈意味〉

咨嗟玉山桂 咨嗟す 玉山の桂

杜甫 八哀詩・贈祕書監江夏李公邕

66 泠泠松桂吟 泠泠たる松桂の吟

生自楚客腸 楚客の腸より生ず

孟郊 張徐州席送

は詩の秀拔なることを桂に喩えたもの。65は祖父杜審言の詩に対する李邕の批評のことばで、「嗣眞作」とは、審言の五排律「和李大夫嗣眞奉使存撫河東」を指す。「玉山桂」は晋・郗詵の「桂林一枝、崑山片玉」の二句を一語にまとめたものだが、他に用例のない杜甫の造語⁽⁴⁾。

67 桂枝芳欲晚 桂枝 芳り晚れんと欲し

蕙苴誘誰明 蕙苴 誘りを誰か明らめん

陳子昂 題居延古城贈喬知之

68 空摧芳桂色 空しく芳桂の色を摧かかるも

不屈古松姿 古松の姿を屈せず

李白 贈易秀才

69 颿颿寒山桂 颿颿たり 寒山の桂

低徊風雨枝 低徊す 風雨の枝

杜甫 贈崔十三評事公輔

は、いずれも桂の被害をもって、士の不遇・枉屈に喩えたもの。67は喬知之の人格・才能が埋もれるまま老いを迎えるようにするのを傷む。68はおそらく流謫決定時の作。李詩の桂には、私には確実な解釈を得がたい場合が少くない。これもその一例であるが、二句の主語の自他、後句の平叙か命令かにかかわらず、古松Ⅱ内に一貫する節操、芳桂Ⅱ外に発して喪われやすい若年の風采という対置だろう。69は謝靈運「入華子崗」の「桂樹寒山を陵ぐ」を踏まえ、幕僚の境涯に浮沈する崔の不遇をいう。

70 清桂無直枝 清桂に直枝無し

碧江思舊遊 碧江 旧遊を思ふ

孟郊 夜感自遣

前句の裏は「濁桂（成立不可能な概念だが）に直枝有り」ということになるわけで、すんなり登第する時輩の折り採る桂枝は汚れたもの、自分のような清廉の士は枉屈を受けるのが宿命である、といたいらしい。前引4「桂枝生自直」の翻案であり、おそらく「招隱士」の「偃蹇連蜷兮枝相繚」に依拠している。

イデオロギーに帰属させるなら、(b)隱遁・脱俗の桂が道家的であるのに対して、この項の桂が象徴する価値は儒家的といえよう。しかし、イデオロギー次元での相補的関係以上に、一般唐詩人のエトスにおいて、儒道の価値体系は連続し重なりあうものだったから、正統的倫理から意味づけられた桂も、山中高德の隱士という理想型を介して、(b)脱俗・隱遁の桂とごく自然につながっている。

「招隱士」王逸注が原型を描いたこの種の桂Ⅱ隱士像は、六朝詩にも現われ(4・5)、政治参加への期待と失意が広汎な詩人たちに共通のものとなった唐代に至ってより一般化した。上掲60・69にもその傾向は窺えるが、もう少

し明瞭な例を挙げてみる。

71 蘭葉春葳蕤 蘭葉 春に葳蕤

桂華秋皎潔 桂華 秋に皎潔

欣欣此生意 欣欣たる此の生意

自爾爲佳節 自爾おのづから佳節を爲す

誰知林棲者 誰か知らん 林棲する者の

聞風坐相悅 風を聞かぎて 坐ろに相悦ぶを

草木有本心 草木 本心有り

何求美人折 何ぞ美人に折らるるを求めんや

張九齡 感遇十二首・其一

林中の蘭桂は、風に漂うその香りを人知れず愛であえばよい（林棲者＝蘭桂と解する）のであって、「本心」は自らにおいて充足し、美人（一次的には女性であろう）の手折るを求めない、つまり山林の士は同類に理解されればよい存在というわけだが、折られることを求めぬ本心（ここも草木の心と双関）とは、もとより決して折られるに適わしからぬ心ではありえまい。

72 千巖一尺壁 千巖 一尺の壁

八月十五夕 八月 十五夕

清露墮桂花 清露 桂花に墮ち

白鳥舞虛碧　　白鳥　　虛碧に舞ふ

賈島　詠韓氏二子

あまりにも感覚的な肖像であり、桂花のみを引き抜いて倫理性を云々するのは無意味に近いかもしれない。しかし、この清澄な脱俗的イメージも、士の品性・風采を象徴する点で、前出の諸用例と連続するものであることは否定できない。

ここで、比喻に托された観念の連続と分化とは別に、比喻するもの（桂）とされるものとの関係が問題になる。人物に属する美質、あるいは美質を具えた人物そのものが比喻の対象であるこの種の桂では、両者の関係がより直接的であり、比喻の意味性が強い。これに對して、脱俗・隱遁の桂は基本的には人物の喩ではなく、情況・行為の喩であるといつてよい。いわば、人の喩に對する事の喩である脱俗・隱遁の桂が、「攀」「折」などの行為を介して対象化される分だけ自然へと還元され、そのことによって、直接的な観念の喩から、人事への連想ミニマムの実景までつながる表現域を持ちえたのに對して、人格・才能の桂はより緊密に人間と結びつけられ、自然物として自立する方向が乏しいといえる。それだけを切り離せば高度な景のイメージとなる72の句も、人物のメタファとして完結したものであることは、いうまでもない。この類の桂に多く見られる松・蘭との並・對置も、意味的な比喻であり、景に傾く脱俗・隱遁の松桂とは対照的な性格を示している。

相補・連続しながらも對立する唐詩人のエトスの両極に隱遁と濟世が考えられるとして、人格・才能の桂が比喻するものは、廟堂に立つ現実態であるよりは、隱士としての潜在能力であることの方がはるかに多いが、そして、それはたぶん、隱遁への連想が常にいくぶんかはつきまとう桂の香りの「おくゆかしさ」によるものだろうが、なおかつ、

對極にある倫理の抔びとる自然の在り方が、比喻の構造の違いとなつて現われているといつても、あながち牽強な見方ではないと思う。

1 王逸の解釈によれば「申、重也、椒、香木也、其芳小、重之乃香、菌、蕙也、葉曰蕙、根曰薰、すなわち、「重なれる椒と菌と、桂とを雜ふ」ということになる。その他、唐代までの注釈を挙げれば、陸善經（旧鈔本『文選集注』所引）は、「申椒、椒名、菌桂、生於枝間也」、李周翰（『文選』五臣注）は「雜、非一也、申、用也、椒菌桂皆香木」。ただし、本草書では菌桂を桂・牡桂と並べて桂の一種とする。なお、唐詩で菌桂を用いる例はきわめて少ない。

2 王逸注「綯、索也、蕙、蕙皆香草、以喻賢者、言禹湯文王、雖有聖德、猶雜用衆賢、以致於治、非獨索蕙、任一人也、故堯有禹咎繇伯夷（中略）是雜用衆芳之效也」

3 王逸注「矯、直也、胡繩、香草也、纏纏、索好貌、言已行雖據履根本、猶復矯直菌桂芬香之性、綯索胡繩、以善自約束、終無懈倦也」

4 (B)項注(4) 参照。

(d) 哀傷

風霜にいためつけられる桂が士の不遇・枉屈の比喻となることは、前項に述べた。折れ・枯れ・凋み・銷亡^{きよう}せるものは人の美質であるから、広くは前項に属するということも可能だが、枝葉の被害に哀傷の意を托す表現の定型を別項に取り出すのが便宜だろう。特に「銷亡」の語については、次の典故が存在し、女性の死、衰残ということが多い。

秋氣慴以淒淚兮 秋氣 慴として以つて淒淚たり

桂枝落而銷亡 桂枝 落ちて銷亡す

漢・武帝 李夫人賦⁽¹⁾

六朝詩から三例を挙げる。

6 霜下桂枝銷 霜下りて 桂枝銷し

怨與飛蓬逝 飛蓬と与に逝くを怨む

齊・謝朓 芳樹

7 曲池無復處 曲池 復処無く

桂枝亦銷亡 桂枝 亦銷亡す

梁・沈約 八詠詩・解佩去朝市

8 春豔桃花水 春には桃花の水の豔やかなりしに

秋度桂枝風 秋には度る 桂枝の風

北齊・盧詢祖 趙郡王妃鄭氏挽歌詞

6はおそらく士不遇の意を含み、7は天子の死による園池の荒廢を悼む。いずれも明らかに「李夫人賦」を踏まえる。
8は銷・亡の字面は用いないが、典故と同主題だから、これを意識しよう。

(6)項に説くべきだったかもしれないが、ここで同じく人物の美質を喩えて松桂と並置もされる、松と桂の違いに触れておくべきだろう。南方の嘉樹である桂の緑濃い闊葉が、きびしい北方の冬にも耐えぬく歳晩の後凋を孔子に称えられた松柏の勁さに比較するとき、秋気や霜露に遭った程度でも銷亡(凋み、枯れ、墜ちる)する弱さを持つのは、当然である。松柏もよほどの風雪には折れるだろうが、銷亡という事態はまずおこりえない。68李白の「空摧芳桂

色、不屈古松姿」は、この対比の端的な表現だった。しぜん、不遇・枉屈というネガティブな情況に桂の衰残・銷亡がよく合致することになるのだが、逆にポジティブには、芳香と濃彩という感覚的豊かさが、質に対する文、節義・志操の骨格に対する文才・風姿の発揚といった傾向を桂に与えることになる。さらに、「李夫人賦」のような女性の美の衰残となれば、桂がその比喩にきわめて適わしい景物であることは論を俟たない。以下、唐詩の例を引く。

73 桂枝芳氣已銷亡 桂枝の芳氣 已に銷亡し

柏梁高宴今何在 柏梁の高宴 今何くにか在る

駱賓王 帝京篇

当代の長安を終始漢代のこととして詠じた詩で、典故はまったく生のまま使用されている。

74 丹桂銷已盡 丹桂 銷して已に尽き

青松哀更多 青松 哀しみ更に多し

駱賓王 丹陽刺史挽詞三首・其一

75 蘭芳落故殿 蘭芳 故殿に落ち

桂影銷空苑 桂影 空苑に銷す

權德輿 惠照皇太子挽歌詞二首・其二

挽歌の二例で、75は先の7と同巧の空苑の景。

76 嚴霜五月凋桂枝 嚴霜 五月 桂枝を凋ましむ

伏櫪銜冤摧兩眉 櫪に伏し 冤を銜み 兩眉を摧く

李白 天馬歌

理窟としては、前句の天変を見て伏櫪の天馬がいよいよ落胆するという運びだが、桂枝はまたこの馬の悲運を象徴する。もちろん名伯樂に恵まれぬ不遇の士の歎き。

77 切切重切切 切切 重ねて切切

秋風桂枝折 秋風 桂枝折る

人當少年嫁 人は少年に当りて嫁するに

我當少年別 我は少年に当りて別る

張籍 雜怨

征夫の妻の閨怨。冒頭二句は、棄婦の運命を象徴する一種の興であるが、この単純な措辞と比較するとき、次の二例がいかに異質の表現水準にあるかがよくわかる。

78 風波不信菱枝弱 風波は信ぜず 菱枝の弱きを

月露誰教桂葉香 月露 誰か桂葉をして香しからしめん

李商隱 無題（重帷深下莫愁堂）

79 狂飈不惜蘿陰薄 狂飈は惜しまず 蘿陰の薄きを

清露偏知桂葉濃 清露 偏へに知る 桂葉の濃きを

李商隱 深宮

78は諸家の注、歸一するところを知らぬ有様だが、風波・月露を菱・桂の加害者とし、後句に月桂への連想を含むと

桂——唐詩におけるその〈意味〉

いう高橋和巳『李商隱』の説が正鵠を射ていると思う。79も同質のイメージ。「偏」は、あやにくにも、の気分である。どちらも「李夫人賦」の典故は字面に表われていないが、潜在すると見るべきである。典故に影響されて「枝」をいうことの多かった銷亡の桂に、「葉」の芳香と濃彩を引き入れ、そこに露を滴らせるといふ、豊醇にして苛酷な像の創出は、豔情に執したこの幻視家以外のよくなじうる芸当ではなかった。

先きに松と桂の類似と相違を述べたが、晩唐になると、こんな棄て鉢の言辞を弄する手合いも現われた。

80 梧桐墜露悲先朽 梧桐 露に墜ち 先んじて朽つるを悲しみ

松桂凌霜倚後枯 松桂 霜を凌ぎ 後に枯るるを倚む

不是世間長在物 是れ世間長在の物ならず

暫分貞脆竟何殊 暫らく貞脆を分つも 竟に何ぞ殊ならん

裴夷直 遺意

つまらぬ言いぐさながら、松と桂の抵抗力に差を認めていた従来 of 感性を否定することによって、晩凋の倫理性まで解消してしまふ⁽³⁾とは、唐詩世界の小さな一弔鐘といつていえなくもなさそうだ。

1 『漢書』外戚傳上。

2 一例として最近の注釈書二種の解を挙げれば、安徽師範大学中文系古代文学教研組選注『李商隱詩選』(一九七八・人民文学出版社)は、この詩を、自己の身世の感を未婚の女子の不幸な身の上に托したものとし、二句は、わが身は柔弱な菱枝でありながら風波の摧折を受け、芳ばしい美質の桂葉なのに香りを漂わせる月露の潤いを得られないようなものだ、の意、「不信」は「明知而故意如此」、「誰教」は「本可如此而意不如此」であるという。陳永正選注『李商隱詩選』(一九八〇・三聯書店香港分店)は、恋愛詩と見て、前句は柔弱な菱枝が風波の摧折に耐えられようとは、とても信じられない、の意で、女子の不幸

な体験をいい、「不信」は「不忍信」、後句は女子がそれでも自分のすぐれた資質を守りつづけることをいうとし、屈復の注「桂葉香、喻所思之遺世獨立也、猶言誰令遺世獨立、我安得不相思乎」を引く。

3 この想念がよほど気に入ったと見えて、裴夷直にはまったく同巧の詩がもう一首ある。「寓言」(全五八五八)「秋樹卻逢暖、未凋能幾時、何須尙松桂、搖動暫青枝」

(e) 友情

友情・交際は唐詩の一主題というよりは、抒情を成立させるほとんど普遍的な地平に他ならないが、桂についても、隠遁ならたとえば僧隱への憧れや退休の勧告、人格・才能なら美質への称讃といったかたちで、友情はきわめて広汎な意味の層として広がっているのであって、特に友情の主題を一要素として分離・独立させる必然性はない。ただ、用例は少ないが、特定の典故・措辞と結びついて桂枝を友情の比喻とする詩句のためには、一項を設ける必要がある。これまた『楚辭』であるが、「九歌・大司命」に、

結桂枝兮延佇 桂枝を結びて延佇す

羌愈思兮愁人 羌 愈いよ思ひ 人をして愁へしむ

の詞章があり、王逸は「言ふところは、己れ(屈原)(大司命とともに)竜に乗りて天に沖るも、心の樂う所に非ず、猶ほ木を結びて誓を為し、長立して望み、楚国を想念して、愁へ且つ思ふなり」と釈している。この、桂枝を「結ぶ」ことすなわち遙かな対象に向って誠実を誓う行為、という意味づけが後世の詩に承け継がれた——対象は楚国から友人へと転じたが。

9 仰結桂枝 仰ぎて桂枝を結び

俯折蘭英 俯して蘭英を折る

佳人不在 佳人在らず

結之何爲 之を結ぶも何為んや

魏・文帝 秋胡行・朝與佳人期

は、この典故の詩における初出。情詩の形をとっているが、佳人は賢臣であるという注家がある。⁽¹⁾ この場合、「結」は「大司命」の原義どおり身体に結びつけることのようにであり、必ずしも相手への贈り物ではないかもしれないが、

10 幽巖何有 幽巖 何か有る

丹桂爲叢 丹桂 叢を為す

結枝以贈 枝を結びて以つて贈る

寄之飛鴻 之を飛鴻に寄せん

梁・沈約 贈劉南郡季連

では明らかに贈り物で、あたかも恋愛における同心結のように、枝自体を何らかの形に結ぶのだとしか解しようがない。「結」には「交わりを結ぶ」の意を含めていると思われるが、それがより明瞭なのは、

11 泛舟當泛濟 舟を泛ぶは 當に濟に泛ぶべし

結交當結桂 交りを結ぶは 當に桂を結ぶべし

濟水有清源 濟水 清源有り

桂樹有芳根 桂樹 芳根有り

梁・吳均 酬別江主簿屯騎

である。「大司命」に出る「結桂」を用いた以上の例に対して、

12 洞庭空波瀾 洞庭 空しく波瀾あり

桂枝徒攀翻 桂枝 徒らに攀翻す

宋・謝靈雲 石門新營所住

は、字面としては「招隱士」により、石門の別墅における隱棲の情況をも語らせているだろうが、「美人遊んで還らず、佳期何に由りてか敦うせん」の句を先立てており、やはり友に贈るべき桂枝を虚しく手にとるばかり、という氣持が中心になっている。

この他、六朝詩では、宋梁以後、この交友（むしろ締交ないと誓交というべきか）の桂にかなりまとまった用例が見出されるのだが、唐詩では却って用例が乏しく、絶対数でも六朝詩より少ない。

81 結桂空佇立 桂を結びて空しく佇立す

折麻恨莫從 麻を折るも従ふこと莫きを恨む

李白 夕霽杜陵登樓寄韋繇

は、典故を生のまま用い、後句も大司命の「疏麻の瑤華を折り、將に以って離居（王逸注、謂隱者也）に遺らんとす」に拠る。

82 故人不在茲 故人 茲に在らず

桂——唐詩におけるその〈意味〉

幽桂惜未結 幽桂 未だ結ばざるを惜しむ

皎然 杼山禪居寄溪東吳處士馮

「惜未結」、あるいは「惜しみて未だ結ばず」かもしれない。「結」の具体的動作は不明。

83 何以折相贈 何を以つてか相贈らん

白花青桂枝 白花 青桂枝

李白 秋山寄衛尉張卿及王徵君

全八句の五言古詩の冒頭の二句。題中に「秋山」、末尾の二句に「明発二子を懷ひ、空しく招隱の詩を吟ず⁽²⁾」とあり、贈る側・贈られる側双方について「招隱士」が典故として意識されている。つまり、桂には隱士の境遇・感懷が托されておき、当然脱俗・隱遁の意味にも属するのだが、六朝詩以来の友情を込めた贈り物という意味が加わっていることは明らかである。

1 黄節注『魏武帝魏文帝詩註』に引く朱嘉徵の説に、この詩を「豈鄭風懷賢之詠歎、帝善哉行、慊慊白屋、吐握不可失、同意」といい、朱乾『樂府正義』に「此魏文思賢之詩也」という。

2 この二句は、陸機「招隱詩」(『文選』卷二十二)の冒頭の句「明發心不爽」を踏まえている。

(f) 月柱

月是一個の仙界であり、月桂も仙樹であるにはちがいないのだが、唐詩の月桂はそれだけで相当に豊富な表現と用例(全用例の約一割)を持つ独自の領域を形作っているから、一般の仙樹の項からは独立させて扱わざるをえない。

月桂の説話の起源を突き止めることはむづかしいが、東晋初の人虞喜の『安天論』⁽²⁾に「俗に月中の仙人桂樹を伝ふ。今其の初めて生ずるを視るに、仙人の足見ゆ。漸く已に形を成して、桂樹後に生ず」というのが、文献上の初出であるらしい。⁽³⁾しかし、この記事は一説話の記録というにとどまり、六朝・唐を通じて明らかにこの説話にもとづくと考えられる詩句は、

84 仙人垂兩足 仙人 兩足を垂れ

桂樹作團圓 桂樹 団円を作す

李白 古朗月行

85 桂樹枝猶小 桂樹 枝猶小さく

仙人影不成 仙人 影成らず

李羣玉 初月二首・其一

などはあるが、ごく僅かである。唐人の月桂の観念は、特定の書物に典故を仰ぐということではなく、伝承のなかでおのずと共有されるに至ったものであろう。

月桂を詩中の景物としたのは、『安天論』よりはさらに三世紀近く後の、梁の簡文帝をとりまく宮廷詩のサロンで、たちまち一時の流行となつたらしく、簡文帝・元帝・庾肩吾・庾信等から陳・隋まで、二十余の用例が残されているが、なお唐詩におけるほどの比重は占めておらず、表現の質も月に関する華麗な修辭という域をそれほど超えていない。

13 桂花那不落 桂花 那んぞ落ちざる

團扇誰與妝 團扇 誰が与にか妝はん

桂——唐詩におけるその〈意味〉

梁・簡文帝 望月

ただ、唐詩に引きつがれる発想のパターンがかなり案出されている点は注意してよい（そのうちの二三については後述）。

さて、唐詩の多少とも月桂に関わる表現は、内容別に、一、月桂自体を対象とするもの。二、人事の比喩。これはa科第、bその他に分れる。三、人事以外の比喩。四、対象は地上の桂であるが、月桂への連想を含むもの、と大別することができよう。多少とも関わる、と範囲を広げたのは、四をも含めて考えなければならぬからである。

一は、一方に、やや大げさにいえば、神話的想像力による、月界（及至天上界）の具体的な幻想、他方に桂の語がたんに月をいい替えた美辞にすぎぬもの、という両端の間に広がる領域ということになる。

先ほど『安定論』の説話は唐詩に僅かな影響しか残さなかったことをいったが、唐人が脳裏に描いたものとも普通の月界像は、嫦娥の月宮・蟾蜍・玉兔・桂樹からなるものだった。この四者ワンセットの月界像を一目瞭然に示すものは、唐鏡の背面に鑄出された月宮図であるが、詩の方でも、

86 兔入白藏蛙縮肚 兔は白に入りて蔵れ 蛙は肚を縮ませ

桂樹枯株女閉戸 桂樹は株枯れ 女は戸を閉す

韓愈 晝月

87 免寒蟾冷桂花白 兔寒く 蟾冷たく 桂花白し

此夜姮娥應斷腸 此の夜 姮娥 応に断腸なるべし

李商隱 月夕

など、四者あるいは桂とその他のいくつかを取り合わせて詠じることは、月の詩の常套である。月桂が詩に登場した当初からすでに、

14 嫦娥望不出 嫦娥 望むも出でず

桂枝猶隱殘 桂枝 猶ほ隱残す

梁・劉孝威 侍宴賦得龍沙宵月明

のような例が見られるが、月中の景物のたんなる並置という以上に、これらの間にある種の交渉を想像するなど、天界に即してふくらませた幻想のなかで桂樹が一役を担うという詠じ方は、唐人にはじまる。

88 頗奈蝦蟇兒 頗奈や 蝦蟇児

吞我芳桂枝 我が芳桂の枝を吞む

盧仝 月蝕詩

月蝕に際して蟾蜍に吞食される桂である。

89 蟾向靜中矜爪距 蟾は靜中に向つて爪距を矜り

兔偃明處弄精神 兔は明處に偃りて精神を弄す

嫦娥老大應惆悵 嫦娥 老大にして応に惆悵し

倚泣蒼蒼桂一輪 倚りて泣くなるべし 蒼蒼たる桂の一輪なるに

羅隱 詠月

些末なことではあるが、嫦娥が桂樹に「倚る」というのは、たぶん説話には根拠がなく、詩人の想像に出るものであ

ろう。「蒼蒼桂一輪」とは、月輪いっぱい枝葉を茂らせたさまをいうか。月宮図鏡のデザインでは、中央に大きく桂を描くものが多いが、詩によるかぎり、月翳のどの部分を桂に見立てているかは、明瞭でない。

90 玉輪軋露溼團光 玉輪 露に軋りて 団光濕り

鸞佩相逢桂香陌 鸞佩 相逢ふ 桂香の陌

李賀 夢天

91 玉宮桂樹花未落 玉宮の桂樹 花未だ落ちず

仙妾採香垂珮纓 仙妾 香を採りて 珮纓垂る

李賀 天上謠

92 榆莢散來星斗轉 榆莢 散じ來つて 星斗転じ

桂花尋去月輪移 桂花を尋ね去れば 月輪移る

李商隱 一片

二人の幻視家による完結した天界像のなかに置かれたこれらの月桂は、唐詩でもっとも華麗な幻想性を獲得したもののといえる。

ところで、李賀の「鸞佩」「仙妾」は、娥嫦娥を指すとは受け取りにくい。つまり、さきほどの四者以外の住人の可能性が想定されているらしいのだが、

93 吳質不眠倚桂樹 吳質 眠らず桂樹に倚り

露脚斜飛溼寒兔 露脚 斜に飛んで寒兔を溼らす

李賀 李憑箏篋引

94 莫羨仙家有上眞 羨む莫れ 仙家に上真有るを

仙家暫謫亦千春 仙家暫く謫せらるるも 亦た千春なり

月中桂樹高多少 月中の桂樹 高きこと多少ぞ

試問西河斫樹人 試みに西河斫樹の人に問へ

李商隱 同學彭道士參寥

も別系統の説話によるものであることは明らかで、注家は多く『酉陽雜俎』に「異書に曰く」として、「月桂は高さ五百丈。下に一人有りて常に之を斫るも、樹の創随ひて合す。人の姓は呉、名は剛、西河の人、仙を学びて過ちあり、謫せられて樹を伐ら令めらるる」を引く。93の呉質を右の呉剛の誤りとするのは、定説と見てよいだろう。

95 斫却月中桂 月中の桂を斫却せば

清光應更多 清光 応に更に多からん

杜甫 一百五日夜對月

についても、趙次公以下『酉陽雜俎』を引く注家が多い。趙氏が「是れ杜公の後なり」と雖も、段成式の撰して伝へし所の者は旧し」というのは、「異書に曰く」とあるところからも肯けるが、この説話の支えが不可欠な一聯であろうか。桂樹をとりまく月中の住者の種類は、ほぼ以上に挙げたものに尽きる。

ここで月中の桂を題詠した詩があるので紹介しておこう。

96 與月轉鴻濛 月と与に鴻濛に転じ

桂——唐詩におけるその〈意味〉

扶疎萬古同 扶疎として万古に同じなり

根非生下土 根は下土に生ぜるに非ず

葉不墮秋風 葉は秋風に墮ちず

每以圓時足 毎に円時を以つて足るも

還隨缺處空 還た欠處に随ひて空し

影高群木外 影は高し群木の外

香滿一輪中 香は滿つ一輪の中

未種丹霄日 未だ丹霄に種えざるの日

應虛玉兔宮 応に玉兔の宮の虚しかりしなるべし

如何當羽化 如何んぞ當に羽化して

細得問玄功 細かに玄功を問うを得べきや

張喬 試月中桂

六韻五排律の試帖詩で、凡作だが、ごく平均的な唐人の月桂像を窺うようにはなるだろう。仕上げのおとなしさが要求されるこの手の詩に格別の内容を期待することは無理で、第五聯に桂樹未生以前を空想するのが多少面白味がある程度であるが、いったいに、この好個の題材を種に豊かな想像の翼を拡げたといったぐいの唐人の詩句は、意外に数少ない。

天遠桂輪孤 天遠くして桂輪孤なり

武元衡 奉酬淮南中書相公見寄

98 出門聊一望 門を出でて聊か一望すれば

蟾桂向人斜 蟾桂 人に向つて斜なり

羅隱 旅夢

の桂輪・蟾桂のように、桂を含む詩語がたんなる月の美的換喩という以上に能がないという例が相当数に上るのは、月桂が倚りかかりやすい規範であったことをものがたる。しかし、先の試帖詩もその一例であるが、質の上下は別として、樹木というところに一働きはさせるというのが、唐詩人の平均的な想像力の水準だったと見てよいだろう。やや特色ある二、三の例を加える。

99 今夜月明勝昨夜 今夜の月明昨夜に勝り

新添桂樹近東枝 新たに添ふ 桂樹東に近きの枝

王建 和元郎中從八月十一至十五夜翫月五首・其三

仲秋満月に至る五夜の月を七絶五首に詠み分けたうちの第三首、十三日のもので、月の一タ分の東側へのふくらみを、桂樹の枝が増えたという。

100 欲折月中桂 月中の桂を折り

持爲寒者薪 持ちて寒者の薪と為さんと欲す

李白 贈崔司戸文昆季

桂——唐詩におけるその〈意味〉

杜甫の「斫卻月中桂」とともに、月桂の枝を伐ることを空想している点で異色がある。この二首以外に、月桂に対して積極的な行為を加えることをいう例は見当たらないようだ。薪にするというのは、桂薪の典故（別稿）を踏まえたものの。

101 胎暉子細看 胎暉して子細に看れば

晴瞳桂枝剗 晴瞳 桂枝剗る

賈島 玩月

「瘦」せた詩人が寒月を眺める図で、こちらは桂枝の方が加害的。もっとも、「目常に熱疾あるも、久視すれば煩炎無し」とつづいて、それが眼病に効能を発するのだが、この硬い物質感^{モノカタク}は韓門の詩人ならではのものである。

102 遙知天下桂華孤 遙かに知る 天下 桂華孤なるを

試問嫦娥更要無 試みに嫦娥に問ふ 更に要むるや無や

月中幸有閒田地 月中 幸ひに閒田地有らん

何不中央種兩株 何不中央に兩株を種えざる

白居易 東城桂三首・其三

序があつて、蘇州東城の一株の桂が「樵牧之場」に生じて地を得ぬことを惜しみ、三絶句を賦して唱う、といい、不遇の士への比喩となっているから、先の分類では二に属するのだが、其三は天上への空想なのでここに引いた。李賀・李商隱の幻視に並べれば、身世の感に発する白居易の空想はいかにももっともらしく、かつ一脈の諧謔が感じられよう。

人生的な含みを持つ例が出てきたところで二のグループに移ろう。このうちのa科第は、「桂林一枝」の典故と月桂とを重ね合わせた修辭で、中晩唐の月桂の詩句中かなりの量的比重を占める用法だが、説明はすべて(g)の科第の項に譲る。

科第以外のもののうち、人物の比喩ではないが、月桂に倫理的意味を与えている詩句に、次のようなものがある。

103 酒星非所酌 酒星 酌む所に非ず

月桂不爲食 月桂 食と爲らず

虛薄空有名 虛薄にして空しく名有り

爲君長歎息 君が爲に長歎息す

韋應物 擬古十二首・其七

104 桂樹月中出 桂樹 月中に出で

珊瑚石上生 珊瑚 石上に生ず

俊鶻度海食 俊鶻 海を度りて食し

應龍升天行 應龍 天に升りて行く

元稹 兔絲

どちらも詠懷言志の五言古詩で、前者は冒頭の四句。月桂は、前者では、微賤でも歳晩の節操を貫く「凌霜の葉」に對して、虚名を擁するのみの存在、後者では、他に依存する兔絲に對する独立独行の應龍でなければ獲得しえぬ事業の比喩である。比喩される觀念の一例証であるため、修辭ははなはだ直截。食べられない、というのは、香辛調味料

としての桂（別稿）が考えられているのだろう。

特定人物の比喩として機能しているものは、要するに桂一般の比喩的意味（⑥項）を月桂に結びつけ、一層の美化を加えだけである。

105 霜松貞雅節 霜松 雅節貞しく

月桂朗冲襟 月桂 冲襟朗らかなり

駱賓王 夏日遊德州贈高四

106 月中有孤芳 月中 孤芳有り

天下聆薰風 天下 薰風を聆く

賈島 投孟郊

前者は友人高四の曇りなき人柄を、後者は面会の機会を得ていない孟郊の孤高の性情を、月桂に喩えて称讃する。後者では「桂」の字面を句中に出していない。科第の詩ではこの種の措辞が稀でないが（↓⑧項一七一頁）、それ以外で「桂」字を出さずに桂のことをいう例は少ないようだ。

107 應作芝蘭出 応に芝蘭と作りて出づべし

泉臺月桂分 泉台に月桂を分つ

黄滔 傷翁外甥

哀悼の五律の尾聯で、月桂にも比すべき外甥の翁某が、月からその一枝を分け取って黄泉に下った、の意に取っておく。それが、やがて芝蘭と化して地上に生え出よう、という前句と、時間の順序を逆にした並べ方である。（a）項に引

いた10は、挽歌のなかに用いた一例。

次に、事物への比喩、あるいは関連づけがある程度定型化しているものとして、雪と鏡を挙げておく。雪の光輝が月光と結びつけられるのはごく普通のこと、雪∥桂花の比喩に雪―月―桂の連想が加わる。

108 陰嶺有風梅豔散 陰嶺 風有りて梅豔散り

寒林無月桂華生 寒林 月無くして桂華生ず

許渾 對雪

109 桂冷微停素 桂冷かにして 微かに素きを停め

峯乾不偏風 峯乾きて 嵐を偏ねからしめず

陸龜蒙 殘雪

後者は、桂∥月∥雪ではなく、桂∥月が殘雪を照らすさまかもしれない。鏡の場合も、月∥鏡の類型的比喩が桂を引き出す。

110 寫月無芳桂 月を写すも芳桂無く

照日有菱花 日を照らして菱花有り

駱賓王 詠照

これは、

15 月生無有桂 月生ずるも桂の有ること無し

花開不逐春 花開くも春を逐はず

桂——唐詩におけるその〈意味〉

庚信 鏡

を完全に模仿したもの。

四の、地上の桂を対象としながら月桂への連想を含むものは、両者の関係が直接的な比喻・対照であるか、より間接の連想であるかによって二分される。

111 桂樹生南海 桂樹 南海に生じ

芳香隔楚山 芳香 楚山を隔てしを

今朝天上見 今朝天上に見る

疑是月中攀 疑ふらくは 是れ月中に攀ぢしならん

盧僊 題殿前桂葉

この初唐の宮廷詩では、宮廷Ⅱ天上の等置によって、現実の桂が月中に昇天する。祝賀的嘉樹としての桂の典型的な一例。

112 泛池相皎潔 池に泛びて相ひに皎潔に

壓桂共芳菲 桂を圧して共に芳菲たり

元稹 月三十韻

桂は地上のそれで、降り注ぐ月光のなかに月桂の香りが含まれているから、芳菲を共にするのだろう。圧は、「圧倒する」の意と取るが、併せて、月光の強さに重さを感じているのかもしれない。

113 不辭鵲鳩妬年芳 鵲鳩の年芳を妬むを辞せざるも

但惜流塵暗燭房 但だ惜しむ 流塵の燭房を暗うするを

昨夜西池涼露滿 昨夜 西池に涼露滿ち

桂花吹斷月中香 桂花吹斷す 月中の香

李商隱 昨夜

馮浩はこの桂花を天上のそれと解するが、おそらく一次的には西池の傍に立つ地上の桂樹の花香が秋風に吹き断たれているのだう。⁽⁹⁾ 何焯らのいう如く悼亡の詩であるとすれば、結句は亡き人の死を象徴させていることになろうが、そこまで読み込めるかどうか。

より間接的な連想とは、次のような場合である。

114 中庭地白樹棲鴉 中庭地白く 樹 鴉を棲らしめ

冷露無聲溼桂花 冷露声無く 桂花を湿らす

今夜明月人盡望 今夜の明月 人尽く望む

不知秋思在誰家 知らず 秋思の誰が家に在るやを

王建 十五夜望月寄杜郎中

対比による直接の結合はないが、地上の桂花と明月の間には、月桂への連想が介在しているにちがいない。

115 月午山空桂花落 月は午に 山は空しく 桂花落つ

華陽道士雲衣薄 華陽の道士 雲衣薄し

陸龜蒙 洞宮夕

桂——唐詩におけるその〈意味〉

では、あるいは結合がもう少し直接で、場所が道観であるだけに、矚目の桂花を月中から落ちたものと見ている可能性も考えられなくはない。

116 青桂隱遙月 青桂 遙月を隠し

綠楓鳴愁猿 綠楓 愁猿鳴く

李白 入彭蠡經松門觀石鏡

や72 賈島「詠韓子二子」などでは、月桂が表象される度合いはもっと稀薄になるが、月と桂の定型化した配合の裏には、たんに開花の時期が明月の秋と一致するというだけでなく(116では、季節は夏)、つねになにがしか月桂への連想が働いているだろう。44 王維「鳥鳴磎」にも、このひそかな月桂の存在を感じとることができる。

次に、月桂に関わる類型的修辭の若干について述べる。

まず、しばしば月桂と配合される植物として、一方は天上、一方は地上の存在だが、ともに月桂と共通の幻想性を持つ星榆と蕙莢がある。星榆の出典は、樂府「隴西行」の古辭に、

16 天上何所有 天上 何の有る所ぞ

歷歷種白榆 歴歴として白榆種う

桂樹夾道生 桂樹 道を夾みて生じ

青龍對道隅 青竜 道隅に対す

とあるもので、すでに桂樹と並べられているのだが、この歌謡の白榆・桂樹・青竜はすべて星宿の名とされ、⁽¹¹⁾「道」は黄道のことだという説がある。⁽¹²⁾ここにうたわれた星宿の神話は、月桂の成立に多少関わると思われる。

るが、後代の詩歌にはまったく継承されず、星は月に桂の株を奪われた形になった。唐詩の榆と桂の取り合わせにも「隴西行」が影を落していないとはいえないが、桂はつねに月中のそれである。六朝詩では、

17 漢曲天榆冷 漢曲 天榆冷たく

河邊月桂秋 河辺 月桂秋なり

江總 七夕

の一例のみ。李商隱「一片」⁹²はすでに引いた。

117 千尺長條百尺枝 千尺の長条 百尺の枝

月桂星榆相蔽虧 月桂 星榆 相蔽虧す

盧照鄰 行路難

118 月桂花遙燭 月桂 花遙かに燭らし

星榆葉對開 星榆 葉対ひて開く

劉禹錫 和兵部鄭侍郎省中四松詩十韻

前者の主語は渭橋の傍らに横たわる枯木で、繁茂を誇った昔日のさま。一本では「丹桂青榆」と色彩が加わるが、後者とともに単純な美辞の域を出ない。幻想のふくらみが感じられるのは、先の「一片」と、同じ詩人の、

119 桂嫩傳香遠 桂は嫩うして香を伝へること遠く

榆高送影斜 榆は高うして影を送ること斜なり

李商隱 壬申七夕

桂——唐詩におけるその〈意味〉

であらう。

蕙莢になるといよいよ神秘的で、堯の階前に生じたという瑞祥性（特に宮廷詩において）と、月齢とともに榮彫するという特性による修辭的価値以外の内容を感じることがむづかしく、月の縁で桂と並べられ場合も事情は変らない。

120 桂吐半輪迎此夜 桂は半輪を吐きて此の夜を迎へ

蕙開七葉應今朝 蕙は七葉を開きて今朝に応ず

李嶠 人日侍宴大明宮恩賜綵繡人勝應制

七日の月齢を半輪・七葉によって指定する修辭の技巧が興味を中心である。月桂・蕙莢ともに、この種の儀礼的な祝賀の気分には恰好の題材だった。

121 桂含爽氣三秋首 桂は爽氣を含む 三秋の首^{はじめ}

蕙吐中旬二葉新 蕙は中旬に吐く 二葉の新たなるを

李商隱 和韋潘前輩七月十二日夜泊池州城下先寄上李使君

こちらは私的な場だが、やはり儀礼性が桂・蕙の対を使用させているだろう。日時を指定する修辭的興味も、120と同質である。

同じく月の縁語である珠との並置も、ここに加えてよいだろう。

18 天漢看珠蚌 天漢に珠蚌を見

星橋視桂花 星橋に桂花を視る

北周・庾信 舟中望月

122 裊露珠暉冷 露に裊ひて珠暉冷たく

凌霜桂影寒 霜を凌ぎて桂影寒し

駱賓王 秋晨同淄川毛司馬秋九詠 秋月

123 蚌胎未滿思新桂 蚌胎未だ満たずして新桂を思ひ

琥珀初成憶舊松 琥珀初めて成りて旧松を憶ふ

李商隱 題僧壁

122の珠暉はむろん露の玉の光であるが、月の縁語という意識が働いて桂と対にされているだろう。蚌珠と月桂を一句のうちに収め、その盈虚に輪廻の相を見る123李商隱の思想性は、やはり異色のものではあった。

最後に、月輪の「輪」と桂を結んだ修辭に触れておく。

124 盈缺青冥外 盈欠す 青冥の外

東風萬古吹 東風 萬古に吹く

何人種丹桂 何人の丹桂を種えしや

不長出輪枝 輪を出づるの枝を長ぜず

張喬 對秋月二首・其一

96と同一人の作、どちらも桂を「種」えることを問題にしている。この転結二句は、明らかに、

19 星流時入暈 星流れて時に暈に入り

桂長欲侵輪 桂長じて輪を侵さんと欲す

桂——唐詩におけるその〈意味〉

梁・庾肩吾 和徐主簿望月

の後句に対する一種の翻案である。89の「蒼蒼桂一輪」は月をいう習見の詩語「桂輪」を、桂樹の形状の表現へと活用させたものだろうが、

125 散滿蘿垂帶 散滿として蘿は帯を垂れ

扶疏桂長輪 扶疏として桂は輪を長ず

李德裕 首夏清景想望山居

には、庾肩吾の句の影響が感じられる。この夏景の桂はひろん地上の樹で、長輪といういい方——ここでは樹全体の形状をいうとしか解しようがない——は、月を媒介としなければ成立しえないだろう。不在の月は、いわば虚の位置で一句を支えているわけだ。月桂という局限された題材に関して、表現の継承と変容がいかに行われているかを知るための例として挙げてみた。

なお、月桂に関する觀念に、月中の桂子が落ちるといふのがあり、唐詩人の想像にかなりの刺激を与えている。この項に併せて記述すべきところであるが、やや特殊な幻想なので、「桂子落」の項目を立て、別稿に廻す。

- 1 嫦娥・顧兔・蟾蜍が先秦の文献に見えるのに対し、月桂の觀念が先秦に出現していることを示す材料は存在しないが、文献に先立つ出土資料として、漢墓の壁画がある。洛陽博物館署名の「洛陽西漢卜千秋壁畫墓發掘報告」に見える洛陽邙山南麓焼溝村の卜千秋墓の壁画がそれで、月中に桂樹と蟾蜍を画く（「文物」一九七七年第六期）。同「報告」によれば、前漢の昭帝—宣帝間のもの。他に、『四川漢代畫像選集』（一九五九、文物出版社）にも、月兔と桂樹を画く漢代の画像石の図版を掲げる。
- 2 『初學記』卷一月所引。『太平御覽』卷四月に引くものもほぼ同文。

- 3 『太平御覽』卷九百五十七桂に「淮南子曰、月中有桂樹」の一文を引くが、現行の『淮南子』には見えぬ記事で、おそらく

誤伝だろう。

4 梅原未治編著『唐鏡大觀』下に四面の図版を掲げる。

5 前集卷一、天咫。

6 『九家集注杜詩』所引。

7 全文は「蘇之東城、古吳都城也、今爲樵牧之場、有桂一株、生乎城下、惜其不得地、因賦三絕句。以唁之」。なお、この一首は「桂華曲」の名で歌唱された。白居易「醉後聽唱桂華曲」(全五一八七・別七七二)序に、「詩云」として一首を引いた後、「此曲韻怨切、聽輒感人、故云爾」という。詩は、「桂華詞意苦丁寧、唱到常娥醉便醒、此是世間斷腸曲、莫教不得意人聽」。

8 馮浩『玉溪生詩集箋注』卷二「下二句人間天上之慨」。これは、令狐綯への寓意の詩と見なした上で、高位にある綯を月中の桂に喩え、人間の我が身にはその香気が及ばない、の意に解しているらしい。

9 屈復『玉溪生詩意』卷七「年芳已晚、燭房塵暗、所以西池涼露、桂香吹斷、而不忍歸房中也」。詩人の位置には問題があるが、ほぼ当たっている解釈と思う。

10 朱鶴齡注本欄外に載せる何焯の評、「此言失意之中不堪加以悼亡也」。張采田『李義山詩辨正』も「定爲悼亡亦得」という。

11 黃節『漢魏樂府風箋』・余冠英『樂府詩選』。桂樹について、黃節は『春秋運斗樞』の「椒桂合剛陽、椒桂、陽星之精所生也」を引く。

12 余冠英前掲書。

(g) 科第

西晋の郗(郗)詵の「桂林一枝」の典故にもとづく詩的意味。この典故は「招隱士」のそれについて唐詩における使用頻度の高いもので、桂字の全用例中、約一・五割を占める。

桂——唐詩におけるその〈意味〉

邵詵の話は『晋書』本傳に見え、⁽¹⁾ 対策第一で賢良直言科に挙げられた詵が、その後、雍州刺史に任ぜられた際、武帝の問いに答えて、天下第一の対策を書いた自分にとって、一州刺史などは「桂林の一枝、崑山の片玉」のようなものだ、と豪語した、というものである。この話は、西晋の九品中正制度下における制舉の一つである賢良直言科に関するものであるが、貴族社会全盛の六朝では、貢舉の制度自体がかすんだ存在になってしまい、科第の詩というものが出現していなかったため、詩の典故としてはまったく無視されていた。唐代に入っても、しばらくは同じ状態がつづいたが、進士科の優位が確立し、詩の主要な担い手が進士出身者及びその予備軍に移り、科第の詩、あるいは詩中で科第に言及することが急増した盛唐に至って、⁽²⁾ いわば再発見され、俄然科第に関する典故のなかでもことに愛用されるようになったのである。

もっとも早い用例に、

126 桂枝如已擢 桂枝 如し已に擢かるれば

早逐雁南飛 早く雁の南に飛ぶを逐へ

孟浩然 送洗然弟進士舉

127 欲折一枝桂 一枝の桂を折らんと欲す

還來雁沼前 雁沼の前に還り來れ

李白 同吳王送杜秀才芝舉入京

その他、杜甫・岑參・王昌齡などのものがあるが、⁽³⁾ そのすべてについて先後を定めることはむづかしい。賦・駢文などの資料には当たっていないので、誰が使いはじめたかを明らかにすることはできないが、詩においては、おそらくこ

れら盛唐を代表する詩人たちが期せずして一斉に使いだしたものであろう。盛唐ではまだ用例はそれほど多くないが、中唐にやや増加し、晩唐に激増する。特に唐朝もどんづまりの晩唐後期に多く、この典故の濫発によって自己の作品中の桂字の使用数を著しく水増しさせている羅隱・杜荀鶴のような詩人が現われるに至った。

前記のごとく、「桂林一枝、崑山片玉」という邵詠のことは、官職に不満を示し、己れの才能を誇る豪語である。したがって、唐詩人が桂枝をもって進士出身の資格を比喻し、折・得・攀などの動詞によってこの資格を獲得すると、すなわち進士科に及第することを意味させた用法は、原義を大きくねじ曲げてたものである。原文では卑小視されていた一枝が、唐詩では、約百倍の競争の末に択ばれた年平均三十名の及第者の一人（より正確には、合格人員中の一名分）という、無上の光栄を意味することになった。⁽⁴⁾上掲のもっとも早い用例でこの転義はすでに完了しており、以後唐一代のみならず、後世まで承け継がれていることになるのだが、これは、彼ら盛唐詩人たちの積極的な読み変えと理解すべきであろう。香り高き嘉樹の一枝を、唐詩人たちは科第に寄せる情熱と憧憬を象徴するに恰好の景物として択んだのであり、憧憬はやがて桂枝を月宮の高みにまで押し上げることになる。

断りなしに進士科といってきたが、この典故を進士科以外に用いた例がないわけではない。

128 青桂春再榮 青桂 春再び榮かん

白雲暮來變 自雲 暮來変ず

王昌齡 送劉沅虛歸取宏詞解

は、題中に宏詞と明記しており、「春再榮」とは、進士科に及第している上に、さらに博學宏詞科にも及第するとの予言だろう。

129 昔饒春桂長先折 昔は春桂長に先んじて折らるるを饒し

今伴寒松取後凋 今は寒松後凋を取るに伴ふ

白居易 因思往事兼評今懷重以長句答之

晚年東都分司時代の劉禹錫に答える詩で、聯下に「昔科第に登るに、夢得多く先に居る。今暮年を同じうし、洛下に老伴と為る。」の自注がある。前句、進士科だけでなく、吏部試でも劉が先輩だったというのである。

しかし、これらの諸科について用いた例はごく少数であり、特にその旨が詩題や自注に明記されるとか、詩句にそれと明瞭に分る表現がある場合の他は、まず重要度に格段の差があった進士科を指すものと考えてよい。

この典故は、自他を問わず、およそ科第に関わるあらゆる情況に適用されたといつてよい。科第そのものを主題とする、赴挙・及第・落第の詩はもとより、自己の閥歴を述べたり、友人との交際を追想する詩で、公的生涯の最大の通過点である科第に触れる際に用いることも多い。情況別に列挙してゆけば、唐詩における科第の扱われ方を尽くすことになってしまうので、その若干を挙げるにとどめよう。

130 佇俟明年桂 佇俟す 明年の桂

高堂開笑言 高堂に笑言を開くを

劉禹錫 送李友路秀才赴舉

131 柳條此日同誰折 柳条 此の日 誰と同にか折らん

桂樹明年爲爾春 桂樹 明年 爾が為に春なるべし

方干 送弟子伍秀才赴舉

及び128 129は赴奉の人を送別する。当然「明年」が問題であり（郷貢進士は前年十月に長安に期集する）、「明年桂」が成語となっている。

132多才白華子 多才なり 白華の子

初擅桂枝名 初めて桂枝の名を擅にす

李端 送鄭巨及第後歸覲

133楊葉射頻因偶中 楊葉 射ること頻りなれば 因りて偶たま中る

桂枝材美敢當之 桂枝 材の美なるは 敢へて之に当らんや

歐陽詹 及第後酬故園親故

は及第の詩。134は及第した知人を送別する。及第者は一たん帰省するのが通例なので、及第の詩は題中に帰省・帰覲などの語が加わり、詩中にも、桂枝とともに、白華・錦衣など孝養に関する語が現われることが多い。134の及第者は作者自身で、合格をまぐれ当りと謙遜する。

134獨歸初失桂 独歸 初めて桂を失ひ

共醉忽停杯 共に酔うて忽ち杯を停む

盧綸 送魏廣下第下揚州

135名慚桂苑一枝綠 名は慚づ 桂苑一枝の緑なるに

鱸憶松江兩筍紅 鱸は憶ふ 松江兩筍の紅なるを

羅隱 東歸別當修

は下第。134は人を送り、135は自分が故郷へ隱棲しようという。下第の詩と意境が近いのは、合格せぬまま歳月を重ねているという不遇の歎きである。

136 若無攀桂分 若し攀桂の分無くば

祇是臥雲休 祇是れ雲に臥して休みなん

賈島 青門里作

首聯に「燕は存して鴻は已に過つ、海内幾人か愁ふ」尾聯に「泉樹一たび別れを為してより、依稀たり三十秋」とあって、今年もまた駄目だったという歎き。

137 郢詵丹桂無人指 郢詵の丹桂 人の指さす無く

阮籍青襟有淚霑 阮籍の青襟 涙の霑ふ有り

韋莊 冬日長安感志寄虢州崔郎中二十韻

「無人指」とは、「あれが今春の及第者よ」と指される身になれなかった、の意だろう。これを他人の上に移せば、不遇の士への同情となる。

138 仙桂終無分 仙桂 終に分無し

皇天似有私 皇天 私有るに似たり

杜荀鶴 經賈島墓

は、136の詩句に対する後人の哀しい挨拶である。

139 生前有敵唯丹桂 生前 敵有りしは唯丹桂のみ

没後無家祇白蘋 没後 家無く 祇白蘋のみ

皮日休 傷進士嚴子重詩

も遂に及第することなく没した友を悼む。題中の進士は、むろん郷貢進士のことである。

自他の及第の先後を述べたものに130があったが、同じ詩人の、

140 玉憐同匠琢 玉は憐れむ 匠を同じうして琢かれしを

桂恨隔年攀 桂は恨む 年を隔てて攀ぢしを

白居易 和鄭元及第後秋歸洛下間居

は、「高侍郎下を同じうし、年を隔てて及第す」の題下注があり、座主を共にしながら同年でなかったことを惜しむ。一方、

141 桂折因同樹 桂を折るは樹を同じうするに因り

鶯遷各異年 鶯の遷るは各おの年を異にす

白居易 東都冬日會諸同年宴鄭家林亭

では、同年であった者⁽⁷⁾が、任官では先後を生じたと述べている。この間に吏部の試という難関が控えていたことは、いうまでもない。

挙業に人生最大の目標を置かぬという態度の表明に用いられることも、また少くない。これにもいくつかのケースがあり、

142 折桂名慚鄧 桂を折るは名鄧を慚ぢ

桂——唐詩におけるその〈意味〉

收螢志慕車 螢を収めて志車を慕ふ

白居易 和春深三十首・其十

は進士科を浮薄として經學に沈潜する篤學の士。⁽⁸⁾

143 不愛春宮分桂樹 春宮に桂樹を分つを愛せず

欲教天子枉蒲輪 天子をして蒲輪を枉げしめんと欲す

翁洮 贈方干先生

は隱君子の風貌。唐末ともなれば、

144 損生莫若攀丹桂 生を損ずるは丹桂を攀づるに若く莫く

免俗無過詠紫芝 俗を免るるは紫芝を詠ふに過ぐる無し

黃滔 寓題

などと、悟ったようなこともいつてみたくなる時勢だった。

ところで、桂は、一方で「招隱士」による隱遁、他方で「桂林一枝」による科第という、士人の処生態度として逆方向の事柄を二つながら象徴するという、奇妙といえは奇妙な性格を持っているわけだ。これが唐詩人にとって別に奇妙なことではなかったのは、出処の双方とともに香り高いものと感じうる彼らの二元相補的価値感による。個々の詩句でどちらを意味しているかは、文脈から明瞭だから、たとえば「攀桂」という同じことばを、詩人たちは平然として双方に使い分けてきたのであるが、これが少くとも立て前上は正反對の態度であるだけに、双方の意味を同じ詩にダブらせて使つてやろうと考える詩人が現われたのも、当然といふべきであつた。

145 桂樹秋來風滿枝

桂樹秋來 風枝に満ち

碧巖歸日免乖期

碧巖の帰日 期を乖ふるを免る

故人盡向蟾宮折

故人尽く蟾宮に向つて折るも

獨我攀條欲寄誰

独り我条を攀ぢ 誰にか寄せんと欲する

吳融 山居即事四首・其一

唐末の二流詩人による月並みな山居の感慨であるが、矚目の桂樹が直ちに二つの典故を呼び出してくるところに、固定觀念化した両義の在り方が窺えよう。この詩では両義を別々の句に分離してあるので分りやすいが、

146 莫便求棲隱

便はち棲隱を求むること莫れ

桂枝堪恨顔

桂枝 顔を恨ましむるに堪へたり

周朴 寄方干處士

では一句に両義を重ね、あなたの草堂の庭に生える桂の枝も、むしろ貢院で手折ってほしいと恨み顔だった、といつて、隠士である方干に応募を勧めているのだらう。

次にこの典故の用法を、情況別の分類を横断する表現の側面から眺めてみる。

まず当然ながら、出典の原文に含まれる一枝・枝を用いることがきわめて多く、全用例の三分の一以上が枝字を含む表現をとる。前出のものにもその例は多かったが、さらに特色ある例を若干引いてみよう。

147 鬢毛灑盡一枝桂

鬢毛灑ぎ尽くす 一枝の桂

淚血滴來千里書

淚血滴り来る 千里の書

桂——唐詩におけるその〈意味〉

趙嘏 下第後上李中丞

俗調であるが、科第に賭けた執念の重さが、一枝の語に凝集しているとはいえる。処士のまま世を終った友を弔う

148 直須桂子落墳上 直須らく桂子墳上に落ち

生得一枝冤始消 一枝を生じ得て冤始めて消ゆるべし

栖白 哭劉得仁

についても同様である。ずいぶんそろそろしい発想かもしれないが、挙場に出入すること三十年、竟に成す所なかったという故人の手向け草に、せめて一枝の桂を生じさせたい、といっている。あるいは遺子に及第の希望を托すのみという寓意があるのか。

149 橘懷三箇去 橘は三箇を懷きて去り

桂折一枝將 桂は一枝を折りて將つ

岑參 送滕亢擢第歸蘇州拜親

150 七葉漢貂眞密近 七葉の漢貂 眞に密近なるも

一枝詵桂亦徒然 一枝の詵桂 亦た徒然たり

杜牧 洛下送張曼容赴上黨召

一枝を数対に仕立てたもの。149は及第と帰親を一聯にまとめ、150は藩鎮の辟召に赴く知人を送る詩で、代々天子に近侍する貴權の家柄に生まれながら、挙業虚しく軍幕に就くことになった、という。

151 北闕南山是故郷 北闕南山是れ故郷

兩枝仙桂一時芳 兩枝の仙桂一時に芳はし

杜牧 贈終南蘭若僧

152 天上高高月桂叢 天上に高高たり月桂の叢

分明三十一枝風 分明なり三十一枝の風

趙嘏 今年新先輩以過密之際每有讌集必資清談書此奉賀⁽¹⁰⁾

は複数の及第者を複数の桂枝で表現した例。151は同年の友と自分の二人を兩枝といい、⁽¹¹⁾152は新及第者の全員を三十一枝という。

153 可憐重試者 憐れむ可し 重ねて試みらるるの者

如折二三枝 二三枝を折るが如し

貫休 送王貞白重試東歸

同じ複数の桂枝でも、これは覆試が行われて再度合格したことを称えたのであるが、⁽¹²⁾このように、桂の字面を出さず、
たんに一枝・枝とだけあって桂林一枝を意味する場合がまま存在する。

154 適賀一枝新 適たま一枝の新たなるを賀せるに

旋驚萬里分 旋ち万里に分るるに驚く

劉長卿 送孫瑩京監擢第歸蜀觀省

155 官序詵枝老 官序 詵枝老い

幽塵范甌空 幽塵 范甌空し

桂——唐詩におけるその〈意味〉

羅隱 寄大理徐郎中

156 未折月中枝 未だ月中の枝を折らずんば

寧隨宋都鴟 寧ぞ宋都の鴟に随はん

李羣玉 送魏珪觀省

これらは、一枝・詵枝・月中枝とあるので分りやすいが、

157 路向東溟出 路は東溟に向って出で

枝來北闕求 枝は北闕に來りて求む

裴說 贈賓貢

では枝の一字で桂林一枝を意味させている（なお、裴說は唐滅亡直前の天祐三年の進士で、この賓貢はおそらく新羅人であろう）。

158 明年從月裏 明年 月裏從り

滿握度春關 滿握して春關を度らん

齊己 送人赴攀

になると、五律の尾聯であるが、頷聯までに握る対象のことは何も出てこない。月のなかから握りしめて、というだけで月桂の枝を意味することは、むろん了解済みである。

ところで、理窟をこねるようだが、右の聯で一本の枝を滿握というからには、桂枝は相当に太く、したがって長さもかなりの葉も大いに茂ったものと想像されているようだ。唐末の一斑から全豹を推すのは無理かもしれぬが、唐代

士人の執念が凝り固まった桂枝は、可憐な細枝などではなく、握りぶとのたくましいものだったのではないか。

出典の原文に含まれる語を用いた表現として、一枝の他に、東堂に関するものがある。『晋書』郗詵傳の原文では、東堂は雍州刺史に任ぜられた詵が武帝から送別の会見を賜わった部屋で、桂林一枝の語と同じく、賢良に挙げられた時からは遙か後年の話なのだが、同じ武帝が賢良方正直言を東堂に会して策問したことが『晋書』摯虞傳に見えるので、あるいは両者を混合して作られた表現かと思われる。東堂は試験場の意だが、具体的な貢院の建物というよりは、場屋というほどの抽象化されたニュアンスである。

159 手缺東堂桂一枝 手に東堂の桂一枝を欠けば

家書不敢便言歸 家書に敢へて便ち帰るを言はず

李咸用 投所知

東堂桂から、さらに桂堂の語が生まれた。⁽¹⁵⁾

160 桂堂同日盛 桂堂 日を同じうして盛んに

藝閣間年榮 芸閣 年を間てて榮あり

許渾 贈柳璟馮陶二校書

一枝が多様な修辭の発生源になっているのに対して、桂林の方は科第に関してはほとんど使用されることがない。おそらく三十名前後という合格者数が、林に喩えるには稀少にすぎる印象を与えたためだろう。153のごとく、年次の及第者は何十何人と勘定すべき人数だった。

出典の原文に現われない要素としては、まず季節がある。130・131・133・158のように、春字あるいは春季を意味する

桂——唐詩におけるその〈意味〉

表現が多いのは、いうまでもなく唐代の省試が春季に施行されたためで、一般に科第の詩には頻出することである。ただし129に見える春桂の語は他にほとんど用例がない。科第の詩では桂花に言及することが少ないのは、省試が開花期とかけ離れていたためだが、その例がないわけではない。

161 鵲箭親疏雖異的 鵲箭 親疏 的を異にすと雖も

桂花高下一般春 桂花 高下 一般に春なり

李咸用 贈陳望堯

成績に上下があっても、合格さえすれば名譽は等しい、といっているのだろう。むろん春に咲く桂もあったらしいな
どという事情を持ち出す必要はない。栄光の一枝に香り高い花が開いたさまを想像すればよいのである。

162 解纜西征未有期 纜を解きて西征するに 未だ期有らず

槐花又逼桂花時 槐花 又逼る桂花の時

韋莊 宿泊孟津寄三堂友人

では、桂花時は実際に桂花が咲く秋を指すが、明春の折桂を心裏に置きながら今秋の桂花を詠じている。府州の拔解を前に挙子が忙しくなる七月槐花の時もすぎ、郷貢進士が長安に期集する十月も近づいたのに、今年も投獻・上京の大切な時期を西する船を進める当てもなく過している——来春も応試の期を逸した、という歎きである。

次に、修飾構造の詩語（一桂）中、科第に関する用例が特に多いものとして、月桂は後にまわし、青桂・仙桂・丹桂の三語を採り上げよう。

163 王屋山人有古文 王屋の山人 古文有り

欲攀青桂弄氛氲 青桂を攀ぢて氛氲を弄ばんとす

杜牧 盧秀才將出王屋高步名場江南相逢贈別

164 還被青青桂 還青青たる桂の

催君不自由 君を催して自由ならしめざるを被る

羅隱 商於驛與于縉玉話別

青く茂る常緑の葉が、科第の桂枝にもまことに適わしい、という以上につけ加えるべきことはない。

卻説の崑山・桂林の対は、恐らく『山海經』を踏まえており、「桂林八樹」が崑崙山とともに半ば神話的な存在なのだから、原文自体仙界への連想を含むものであった。仙桂の語は、進士及第への強烈な憧憬を托すべく、原文の含意を一そう顕在化したものといえる。

165 一枝仙桂已攀援 一枝の仙桂 已に攀援し

歸去煙濤浦口村 歸り去る 煙濤浦口の村

黃滔 出京別同年

など、科第についての用例は晩唐にかぎられるようで、科第と月桂が結合した以後用いられるようになったらしい。したがって、特にそれと明示する措辞がなくとも、仙界の一つである月宮への連想が潜在する場合が多いと思われる。丹桂が科第の詩句に好んで使用されたのも、丹字の〈仙〉的性質による。

166 鹿鳴筵上強稱賢 鹿鳴筵上 強ひて賢と称せられ

一送離家十四年 一たび送られて家を離れること十四年

桂——唐詩におけるその〈意味〉

同隱海山燒藥伴

同じく海山に隠れて藥を燒きし伴

不求丹桂求登仙

丹桂を求めずして登仙を求む

張巖 自諷

結句、丹桂が仙樹であればこそ、自嘲に皮肉な藥味が効く。

167 難將白髮期公道

白髮を將って公道を期し難し

不覺丹枝屬別人

覺えざきり 丹枝の別人に属せんとは

羅隱 東歸

は、丹桂枝を丹枝に縮めたもの。

唐人がつけ加えた原文にない要素のうちで、もっとも重要なものは、月桂の観念だろう。もともと無関係だった桂林一枝の典故と、月中の桂の伝説を結びつけることによって、進士及第は九天の高みにまで舞い上ったのだが、唐代士人の科第に寄せる情熱の烈しさを思えば、この結合はまことに自然というべきだった。盛唐にはまだこの結合は見られず、中唐前期の

168 碧霄知己在

碧霄に知己在り

香桂月中攀

香桂 月中に攀ちん

冷朝陽 送唐六赴攀

あたりがもっとも早い例であるようだ。多彩な修辭を伴って頻用されるようになったのは、やはり晩唐に入ってからである。

169 名場失手一年年 名場に手を失すること一年年

月桂 嘗聞到手邊 月桂 嘗つて手辺に到るを聞く

方干 題贈李校書

の月桂、及びこれを多少変形した月中桂、156の月中枝などがごく普通のいい方。―桂型の成語としては他に

170 蟾桂雲梯折 蟾桂 雲梯折れ

鰲山鶴駕遊 鰲山 鶴駕遊ぶ

杜荀鶴 贈聶師

の蟾桂がある。

171 但使他年遇公道 但他年公道に遇はしむれば

月輪長在桂珊瑚 月輪長に在りて桂珊瑚たり

章碣 下第有懷

172 望月疑無得桂緣 月を望むに疑ふらくは桂を得るの縁無かりしならん

春天又待到秋天 春天又た秋天に到るを待つ

李頻 述懷

などは、この科第プラス月のイデオムの多様な修辭の一端である。

173 滿袖歸來天桂香 滿袖 歸來して 天桂香ばし

紫泥重降舊書堂 紫泥重ねて降る 旧書堂

桂―唐詩におけるその〈意味〉

羅鄴 費拾遺書堂

174 昔年行樂及芳時 昔年行樂して芳時に及ぶ

一上丹梯桂一枝 一たび丹梯に上りて桂一枝

司空圖 楊柳枝壽杯詞十六首・其十一

など、それと明示することばかりがなくなるとも、天上の桂、そこに懸ける梯子(170にも雲梯があった)などが、月桂を前提とすることは、いうまでもない。

175 想得月中仙桂樹 想ひ得たり 月中の仙桂樹

各從生日長新枝 各おの生日より新枝を長ぜしを

杜荀鶴 顧雲侍御出二子請詩因遣一絕

月桂が下界の人間に應じて新枝を生ずるという表現は面白い。⁽¹⁶⁾ 子讚めの詩で、お二人の生まれた日には、将来の及第を予定して枝が一本ずつ生じたことでしょう、といっている。

次に、目的語の桂に加えて及第を意味する動詞について。「折」が最多で、折桂と熟した143のほか、127・129・141・142・145・149・153・156などみなそれである。次に多いのは「攀」で136・140・144・163など。二音節の攀折・攀援165も用いられている。攀援はもろんであるが、攀一字の場合も、「招隱士」に由来する桂の縁語で、「招隱士」の影響力が別の典故を使用する場面にまで及んでいるわけである。用例はそれほど多くないが、注意すべきは「擢」であろう。

176 桂枝常共擢 桂枝 常^かつて共に擢でられ

茅茨冀同薦 茅茨 同じく薦められんことを冀ふ

蕭穎士 答鄒象先

及び127。擢桂は擢賢・擢能、なかんづく擢第などに擬えて作られたことばだろう。したがって、本来擢く主体は考官ないし天子、挙子は擢れる側であって、折・攀とは逆の關係になる。そして、桂の一枝Ⅱ及第者の一名として、士林の中から擢かれると解するなら、桂に擢でらる。桂Ⅱ秀れた才能・文章と取り、それが擢かれると解する（典故の原文により忠実）なら、桂を擢でらる、という訓になる。ただ、折桂・攀桂などへの類推で、挙子が桂を擢くと意識されてきた可能性はないであろうか。

最後に、この典故が、同じく及第を比喻する楊葉を射る（穿つ）という養田基の故事と対句をなす例が中晚唐詩に散見することに触れておく。両者とも植物が出てくるうえに、楊・桂、葉・枝、おまけに穿・折まで平仄が逆であるから、対句に仕立てるにはしごく都合が好い。意味上も、穿楊が難関を突破することのむつかしさ、折桂が獲得した名誉・栄光という対比をなす。133、

177 謬折桂高枝 謬って桂の高枝を折り

幸穿楊遠葉 幸に楊の遠葉を穿つ

白居易 敘德書情四十韻上宣歙翟中丞

178 礪鏃端楊葉 鏃を礪ぎて楊葉に端し

光門待桂枝 門を光かさんと桂枝を待つ

劉得仁 山中舒懷寄上丁學士

総じて桂林一枝の典故による詩句は、桂の他の用法に比較して、手の込んだ表現を取るものが多い。これは、貢舉

が一定の機構を見えた制度であり、かつ土人相互の交際の結節点となつて、寄贈応酬の詩が多いことから、他の詩的意味のどれよりも複雑な事象に対応しなければならなかったためであり、加えて、生涯の一大事が持つ重さが、おのずと詩人たちを修辭の技巧に趣かせたという事情が与っているだろう。したがって一個の典故をめぐる多彩な修辭の工夫を楽しむにはこと欠かないが、修辭を超えた手ごたえを感じさせる詩句は乏しいといわざるをえない。現代の讀者が科第に賭けた唐詩人の執念を共有しえないのはやむをえないとして、典故の規範性が詩的内実に先行するという社交の詩に起りがちな事態も無視できないと思う。ことに、進士予備軍の底辺の拡大につれて登第がますます困難になる一方、登第したところで政治的抱負の実現はほとんど期待しえなかったはずの唐末になって、使用数が激増するとともに、泣き言の色が濃くなり、修辭ばかりが巧緻に展開するという事態には、一枝に賭けられた執念が空転して詩の悲惨を産んでいるといった感を禁じえない。

1 『晉書』卷五十二郗詵傳「以對策上第、拜議郎、(中略)累遷雍州刺史、武帝於東堂會送、問詵曰、卿自以爲何如、詵對曰、臣舉賢良對策、爲天下第一、猶桂林一枝、崑山片玉、帝笑、侍中奏免詵官、帝曰、吾與之戲耳、不足怪也」

2 徐松『登科記考』卷三十に集録する唐人の貢舉に関する詩は、劉希夷「餞李秀才赴舉」(全八八七)に始まり、初唐詩人の作はこの一首のみ。二首目の王昌齡「送劉資虛歸取宏詞解」(後出128)以下はすべて盛唐以後の作である。

3 杜甫「同豆盧峯貽主客李員外賢子裴知字韻」(全二五七七、別二〇五八)「夢蘭他日應、折桂早年知」・岑參、後出149・王昌齡、後出128。

4 (c)項に引いた杜甫65の「咨嗟玉山桂」が祖父審言の詩を称讃することばであることはすでに述べたが、王灣「哭補闕亡友蔡母學士」の「屢遷君擢桂、分尉我從梅」も、一般のこの典故の用法とは異なるものごとくである。擢桂を及第とすると、上文ですでに「近侍接元臺」といい、この句に屢遷というのと調和しない。蔡母潛が清貴の文学の職(集賢院待制、補闕(詩題による。『新唐書』藝文志によれば右拾遺)、終官は秘書省著作郎)に拔擢されたことを指し、桂は杜甫の場合に近く、秀れた

文章、あるいは文才を意味するのではないか。とすれば、二例とも一般的用法よりはいくらか典故の原文に近い使い方で、盛唐ではまだ用法が固定化していなかったことを示すものといえようである。

5 劉禹錫は貞元九年進士科と吏部の宏辭科にひきつづいて及第、同十一年吏部の書判拔萃科に及第。白居易は貞元十六年進士及第、同十九年書判拔萃科及第、元和元年才識兼茂明於體用科の制舉に及第。

6 もう一例を挙げれば、楊巨源「送司徒童子」(全三七二七)「況復元侯旌爾善、桂林枝上得鸛鶴」は、童子科に赴く少年を送る詩。

7 遷鶯の典故は、及第をいう場合と、任官・昇進をいう場合とがあり、ここは後者。

8 賈島「送蔡京」「易折芳條桂、難窮遼義經」も類似的詩句。

9 「唐摭言」卷十、海叙不遇。

10 「唐詩紀事」卷三十六趙嘏の條に、「開成五年、樂和侍郎下三十一人及第、時在諒闇、率皆雅飲、嘏以詩賀之曰」とあってこの詩を載せる。題中の過密は、文宗の諒闇による歌舞音曲の禁止である。

11 「本事詩」卷三高逸に、「杜舍人弱冠成名、當年制策登科、名振京邑、嘗與一二同年城南遊覽、至文八寺、有禪僧擁褐獨坐、與之語、其玄言妙旨、咸出意表、問杜姓字、具以對之、又云修何業、傍人以累捷誇之、顧而笑曰、皆不知也、杜難訝、因題詩」とあって、この詩を載せる。転結二句は「禪師都未知名姓、始覺空門意味長」。

12 昭宗の乾寧元年に内殿覆試が行われ、王貞白が重ねて選に入ったことは、『唐才子傳』卷十王貞白條、『容齋隨筆』四筆卷六乾寧覆試進士條などに見えるほか、貞白の七絶「御試後進詩」(全八〇六六)の後に、「是年初放二十五人、後覆汰止放十五人也」の自注がある。

13 注(1)。

14 「晉書」卷五十一摯虞傳「(虞)學賢良、與夏侯湛等十七人爲下第、拜中郎、武帝詔曰、省諸賢良答策、雖所言殊塗、皆明於王義、有益政道、欲詳覽其對、究觀士大夫用心、詔賢良方正直言、會東堂策問」。

15 東堂と桂を結びつけたものとも早い例は權德輿「伏蒙十六叔寄喜喜慶感懷三十韻因獻之」(全三六二〇)「握蘭中臺並、折桂

「東堂春」(句下に、「一族代々の名を並べ」「同以進士居甲科、載在登科記内」との自注がある)あたりらしいが、「東堂桂」の成語にはなっていない。なお、李商隱「無題(昨夜星辰昨夜風)」(全五一六三、別一三三)「畫樓西畔桂堂東」の桂堂は、桂を建材とした豪奢な堂の意に用いているが、孤立した用例のようである。

16 同じ杜荀鶴の「送賁貢登第後歸海東」(全七九三三)「直應天上桂、別有海東枝」も同巧の発想。海東の賁貢が登第したので、そちら側に枝を出す(出していた?)だろう、という。

付記

唐詩の桂の詩的意味の中心部分は、ほぼ本稿で記述したところに尽くされていると思うが、終りに本稿に収めることのできなかつた〈意味〉の諸項目を列記しておく。1、材料。残された要素のうち、量的に最大の部分を占める重要な項目。桂の詩の発端である「九歌」に見える最古層の用法を直接継承するものであるが、唐詩では桂字が修飾構造の詩語を作る美的修辭にすぎない場合が多い。酒・舟・旗・建物その他の小項目に分れる。2、桂薪。一の三・注(1)に引いた『戰國策』の蘇秦の故事によるもの。首都の生活の困しさをいう。3、桂蠹、これも『楚辭』に出典を持ち、貞潔な桂が毀損されることから、讒言の比喩などに使われる。4、桂子落。f項の末尾に記した。5、豔情。中晚唐詩に現われる女性の美しさの比喩。6、香辛料、医薬。7、その他に、用例は少いが、それぞれに特色ある発想のパターンが、なおかなり存在する。

引用詩句一覧・唐詩

*『全唐詩』を底本とする。全と略し、中華書局本の頁数を記す。

*特に本文を改めた個所のほか、異文は掲げない。下記の主要詩人の他はほとんど底本以外に当たっていない。

*主要詩人についてののみ、別と略して別集中の所在を記す。版本は、1 近年出版の排印本で、2 現在比較的入手しやすく、3 参考に供すべき注のあるものは注本によるという基準に従って、それぞれ左記のものを採んだ。

駱賓王…陳熙晉箋注『駱臨海集箋注』一九六一年・中華書局

王維…趙殿成箋注『王右丞集箋注』一九七二年・中華書局香港分局

李白…王琦注『李太白全集』一九七七年・中華書局

杜甫…仇兆鰲注『杜詩詳註』一九七九年・中華書局

白居易…顧學頤校點『白居易集』一九七九年・中華書局

韓愈…錢仲聯集釋『韓昌黎詩繫年集釋』一九五七年・古典文学出版社

李賀…『三家評注李長吉歌詩』一九五九年・中華書局所収、王琦『彙解』

李商隱…馮浩箋注『玉溪生詩集箋注』一九七九年・上海古籍出版社

1 薛能「春日寄懷」全六四八三

2 徐彥伯「擬古二首」其二 全八二〇

3 錢起「送萬兵曹赴廣陵」全二六四〇

4 劉憲「奉和韋嗣立山莊侍宴應制」全七八三

5 鄭愔「奉和幸上官昭容院獻詩四首」其三 全一一〇五

桂——唐詩におけるその〈意味〉

- 6 雍裕之「山中桂」全五三四九
- 7 李頎「送喬琳」全一三六五
- 8 駱賓王「代女道士王靈妃贈道士李榮」全八三八 別一四六
- 9 權德輿「送諡德致政東歸」全三六三三
- 10 顧況「義川公主挽詞」全二九五六
- 11 盧綸「藍溪期蕭道士採藥不至」全三一五七 青、全唐詩は清一作青に作る。青を採る。
- 12 曹唐「小遊仙詩」全七三四六
- 13 李白「白毫子歌」全一七一八 別三八九
- 14 孟郊「終南山下作」全四二六二
- 15 丘丹「和韋使君秋夜見寄」全三四八〇
- 16 楊炯「遊廢觀」全六一四
- 17 于鵠「早上凌霄第六峯入紫谿禮白鶴觀祠」全三五〇八
- 18 陳羽「遊洞靈觀」全三八九四
- 19 韋莊「耒陽縣浮山神廟」全八〇〇四
- 20 張昌宗「奉和聖製夏日遊石淙山」全八六八
- 21 盧綸「早秋望華清宮中樹因以成詠」全三一七六 全題下注「一作常袞作」
- 22 杜淹「寄贈齊公」全四三五
- 23 李白「寄上吳王三首」其一 全一七七八 別七〇一
- 24 盧照鄰「長安古意」全五一九
- 25 陳子昂「入峭峽安居谿伐木谿源幽邃林嶺相映有奇致焉」全九一五
- 26 李白「禪房懷友人岑倫」全一七七二 別六七五

- 27 劉長卿「送鄭十二還廬山別業」全一五二八
 28 皎然「答裴濟從事」全九一八五
 29 羊士諤「和寶吏部雪中寓直」全三六九八
 30 楊凌「潤州水樓」全三三〇五
 31 杜甫「自瀼西荆扉且移居東屯茅屋四首」其一 全二五〇一 別一七四六
 32 杜甫「上巳日徐司錄林園宴集」全二五五七 別一八七六
 33 李白「寄淮南友人」全一七六七 別六五六
 34 耿漳「常州留別」全二九七八
 35 白居易「山中獨吟」全四七五二 別一四六
 36 姚合「寄題尉遲少卿郊居」全四六八〇
 37 王維「崔九弟欲往南山馬上口號與別」全一三〇三 別二五一
 38 李白「贈參寥子」全一七三七 別四九四
 39 杜牧「題池州弄水亭」全五九四七
 40 王建「山中寄及第友人」全三三六八
 41 高適「賦得還山吟送沈四山人」全二二二二
 42 司空曙「過終南柳處士」全三三七
 43 施肩吾「同諸隱者夜登四明山」全五六〇八
 44 王維「皇甫岳雲谿雜題五首・鳥鳴磎」全一三〇二 別二四〇
 45 駱賓王「秋日山行簡梁大官」全八五六 別六〇
 46 李白「日夕山中忽然有懷」全一八五六 別一〇七三
 47 武元衡「郊居寓目偶題」全三五七二

- 48 皮日休「褚家林亭」全七〇九一
- 49 盧照鄰「赤谷安禪師塔」全五一六
- 50 劉長卿「長沙贈衡岳祝融峯般若禪師」全一五七七
- 51 溫庭筠「題中南佛塔寺」全六七五五
- 52 白居易「遊悟真寺詩一百三十韻」全四七三四 別一二〇 全は一百三十韻を題下注とする。宋本に従う。
- 53 杜牧「題揚州禪智寺」全五九六四
- 54 皮日休「開元寺客省早景卽事」全七〇七〇
- 55 盧照鄰「過東山谷口」全五二九
- 56 李白「聞丹丘子於城北山營石門幽居中有高鳳遺跡僕離羣遠懷亦有棲遁之志因敍舊以寄之」全一七六九 別六五七
- 57 劉長卿「酬滁州李十六使君見贈」全一二二五
- 58 李德裕「春暮思平泉雜詠二十首・山桂」全五四〇六
- 59 王績「古意六首」其五 全四七八
- 60 李白「詠桂」全一八七一 別一一三九 多、全は皆に作る。宋本に従う。
- 61 韓愈「重雲一首李觀疾贈之」全三七六九 別一四
- 62 駱賓王「詠懷」全八六一 別一八八
- 63 羅隱「寄蘇拾遺」全七五六五
- 64 韋應物「寄中書劉舍人」全一九一六
- 65 杜甫「八哀詩・贈祕書監江夏李公邕」全三三五一 別一三七二
- 66 孟郊「張徐州席送岑秀才」全四二五〇
- 67 陳子昂「題居延古城贈喬知之」全八九八
- 68 李白「贈易秀才」全一七五一 別五六七

- 69 杜甫「贈崔十三評事公輔」全二四九一 別一二九〇 寒、全は定一作寒一作鄧に作る。寒を採る。
- 70 孟郊「夜感自遣」全四二〇三
- 71 張九齡「感遇十二首」其一 全五七一
- 72 賈島「詠韓氏二氏」全六六二四
- 73 駱賓王「帝京篇」全八三四 別一三
- 74 駱賓王「丹陽刺史挽詞三首」其一 全八五二 別一〇三
- 75 權德輿「惠照皇太子挽歌詞二首」其二 全三六六一
- 76 李白「天馬歌」全一六八四 別一八八
- 77 張籍「雜怨」全四二九四
- 78 李商隱「無題」(重帷深下莫愁堂)全六二〇三 別四五八
- 79 李商隱「深宮」全六一八九 別三五三
- 80 裴夷直「遣意」全五八六三
- 81 李白「夕霽杜陵登樓寄韋繇」全一七六七 別六五三
- 82 皎然「杼山禪居寄溪東吳處士馮」全九一七一
- 83 李白「秋山寄衛尉張卿及王徵君」全一七六七 別六五一
- 84 李白「古朗月行」全一六九五 別二五九 團圓、全は團圓に作る。宋本に従う。
- 85 李羣玉「初月二首」其一 全六五八五
- 86 韓愈「晝月」全三八七一 別一一一
- 87 李商隱「月夕」全六一七九 別六〇二
- 88 盧仝「月蝕詩」全四三八三
- 89 羅隱「詠月」全七五五五

- 90 李賀「夢天」全四三九六 別四六
91 李賀「天上謠」全四三九九 別五四
92 李商隱「一片」全六一七三 別四一二
93 李賀「李憑箏篋引」全四三九二 別三六
94 李商隱「同學彭道士參寥」全六二〇〇 別五四八
95 杜甫「一百五日夜對月」全二四〇四 別三二四
96 張喬「試月中桂」全七三二三
97 武元衡「奉酬淮南中書相公見寄」全三五六五
98 羅隱「旅夢」全七五七〇
99 王建「和元郎中從八月十一至十五夜翫月五首」其三 全三四三五
100 李白「贈崔司戶文昆季」全一七四六 別五三八
101 賈島「玩月」全六六一九
102 白居易「東城桂三首」其三 全五〇二三 別五三五 華、全は花に作る。宋本に従う。
103 韋應物「擬古十二首」其七 全一八九五
104 元稹「兔絲」全四四五〇
105 駱賓王「夏日遊德州贈高四」全八二九 別二二
106 賈島「弔孟郊」全六六二四
107 黃滔「傷翁外甥」全八一〇五
108 許渾「對雪」全六〇八五
109 陸龜蒙「殘雪」全七二〇一
110 駱賓王「詠照」全八六三 別一〇八 詩題、全は鏡詠に作る。別に従う。

- 111 盧僊「題殿前桂葉」全一〇七二
 112 元稹「月三十韻」全四五三八
 113 李商隱「昨夜」全六一九八 別三九六
 114 王建「十五夜望月寄杜郎中」全三四三七
 115 陸龜蒙「洞宮夕」全七二二四
 116 李白「入彭蠡經松門觀石鏡廬懷謝康樂題詩書遊覽之志」全一八四八 別一〇四一
 117 盧照鄰「行路難」全五一八
 118 劉禹錫「和兵部鄭侍郎省中四松詩十韻」全四〇九八
 119 李商隱「壬申七夕」全六一七〇 別四五三
 120 李嶠「人日侍宴大明宮恩賜綵縵人勝應制」全七二三
 121 李商隱「和韋諷前輩七月十二日夜泊地州城下先寄上李使君」全六二二〇 別二二二
 122 駱賓王「秋晨同淄川毛司馬秋九詠・秋月」全八五〇 別四六
 123 李商隱「題僧壁」分六一四五 別五〇三
 124 張喬「對月二首」其二 全七三二八 全は李嶠の卷に「中秋月二首」と題して重出。『文苑英華』卷一五一に従って張喬の詩とする。
- 125 李德裕「首夏清景想望山居」全五四〇九
 126 孟浩然「送洗然弟進士舉」全一六四二
 127 李白「同吳王送杜秀才芝舉入京」全一八〇七 別八四八 詩題、全は芝の下に赴の字有り。宋本に従う。
 128 王昌齡「送劉昶虛歸取宏詞解」全一四二八
 129 白居易「夢得前所酬篇有鍊盡美少年之句因思往事兼評今懷重以長句答之」全五二〇二 別七九五
 130 劉禹錫「送李友路秀才赴舉」全四〇一三

- 131 方干「送弟子伍秀才赴舉」全七四六四
132 李端「送鄭巨及第後歸觀」全二六四三
133 歐陽詹「及第後酬故園親故」全三九〇七
134 盧綸「送魏廣下第下揚州」全三一二五
135 羅隱「東歸別常修」全七六〇六
136 賈島「青門里作」全六六五八
137 韋莊「冬日長安感志寄虢州崔郎中二十韻」全八〇〇一
138 杜荀鶴「經賈島墓」全七九三四
139 皮日休「傷進士嚴子重詩」全七〇八三
140 白居易「和鄭元及第後秋歸洛下間居」全四八二六 別二四八
141 白居易「東都冬日會諸同年宴鄭家林亭」全四八二六 別二四八
142 白居易「和春深二十首」其十 全五〇六四 別五九四
143 翁洮「贈方干先生」全七六四〇
144 黃滔「寓題」全八一一五
145 吳融「山居即事四首」其一 全七八四七
146 周朴「寄方干處士」全七六九七
147 趙嘏「下第後上李中丞」全六三六〇
148 栖白「哭劉得仁」全九二七八
149 岑參「送滕亢擢第後歸蘇州拜親」全二〇七四
150 杜牧「洛下送張曼容赴上黨召」全五九九三 別三五七
151 杜牧「贈終南蘭若僧」全五九九八

- 152 趙嘏「今年新先輩以遇密之際每有讌集必資清談書此奉賀」全六三三三
 153 貫休「送王貞白重試東歸」全九三五九
 154 劉長卿「送孫瑩京監擢第歸蜀覲省」全一五一四
 155 羅隱「寄大理徐郎中」全七五六五
 156 李羣玉「送魏珪覲省」全六五八二
 157 裴說「贈賁實」全八二六一
 158 齊己「送人赴舉」全九四六七
 159 李咸用「投所知」全七四〇八
 160 許渾「贈柳瓊馮陶二校書」全六〇七〇
 161 李咸用「贈陳望堯」全七四〇五
 162 韋莊「宿泊孟津寄三堂友人」全八〇〇八
 163 杜牧「盧秀才將出王屋高步名場江南相逢贈別」全六〇〇六
 164 羅隱「商於驛與于縉玉話別」全七五六九
 165 黃滔「出京別同年」全八一三〇
 166 張嶺「自諷」全八〇八四
 167 羅隱「東歸」全七五六〇
 168 冷朝陽「送唐六赴舉」全三四七二
 169 方干「題贈李校書」全七四八九
 170 杜荀鶴「贈聶師」全七九四四
 171 章碣「下第有懷」全七六五三
 172 李頻「述懷」全六八一二

173 羅鄴「費拾遺書堂」全七五七一

174 司空圖「楊柳枝壽杯詞十六首」其十一 全七二八〇

175 杜荀鶴「顧雲侍御出二子請詩因遣一絕」全七九八〇

176 蕭穎士「答鄒象先」全一五九七

177 白居易「敘德書情四十韻上宣歙崔中丞」全四八二七 詩題、全は崔を翟一作崔に作る。宋本に従う。

178 劉得仁「山中舒懷寄上丁學士」全六三二〇

引用詩句一覽・漢魏六朝詩

* 詩題の直後に記した書名が底本である。

* 總集・類書のうち、文中に記したもののは左記の諸本に拠る。

『文選』一九七二年中文出版社景蕩陽萬氏再刻仿宋胡刻本

『玉臺新詠』吳兆宜原注・程琰刪補『玉臺新詠集箋註』付一九七六年山本書店発行小尾郊一・高志眞夫編『玉臺新詠索引』

景乾隆三十九年稻香樓刊本

『樂府詩集』一九七九年中華書局排印本

『藝文類聚』一九六五年中華書局排印本

『全漢三國晉南北朝詩』一九五九年中華書局排印本（「全漢詩」卷某「全三國詩」卷某等と記す）

* 底本以外は、『文選』及び『全漢三國晉南北朝詩』における所在のみを記し、他の諸本は省略する。

* 特に必要と認めたもの以外、異文は挙げない。

1 『古絕句四首』其四 『玉臺新詠箋註』卷十、一七三頁 「全漢詩」卷三、六〇頁

- 2 曹植「桂之樹行」『樂府詩集』卷六十一、八八六頁「全三國詩」卷二、一五一頁 楊、底本は揚に作る。宋本に従う。
- 3 曹植「朔風詩」『文選』卷二十九、四〇三頁「全三國詩」卷二、一六九頁
- 4 江淹「雜體三十首・劉文學感懷」『江文通文集』卷四、四部叢刊景明翻宋本五頁裏『文選』卷三十一、四三三頁「全梁詩」卷五、一〇四四頁『文選』は山中を中山に、團團を團圓に作る。
- 5 吳均「傷友」『藝文類聚』卷三十四、五九八頁「全梁詩」卷八、一一三八頁 底本は作者を吳筠に作る。「全梁詩」に従う。
- 6 謝朓「芳樹」『謝宣城集』卷二、四部叢刊景明抄本四頁表「全齊詩」卷三、八〇一頁
- 7 沈約「八詠詩・解佩去朝市」『古詩紀』卷八十四、吳琯校刊本一九頁表「全梁詩」卷四、一〇二八頁
- 8 盧詢祖^傳「趙郡王妃鄭氏挽歌詞」『北齊書』卷三十二本傳、一九七二年中華書局排印本三二一頁「全北齊詩」一五一五頁
- 9 魏文帝「秋胡行三首」其二『樂府詩集』卷三十六、五二八頁「全三國詩」卷一、一二五頁
- 10 沈約「贈劉南郡季連」『文館詞林』一百五十八卷、一九六九年古典研究会景弘仁本六八頁「全梁詩」卷四、九九八頁
- 11 吳均「酬別江主簿屯騎」『文苑英華』卷二百六十六、一九六六年中華書局景印本^{該卷景明刊本}一三四頁「全梁詩」卷八、一二二五頁
- 12 謝靈運「石門新營所住四面高山迴溪石瀨脩竹茂林詩」『文選』卷三十、四一五頁「全宋詩」卷三、六四三頁
- 13 梁簡文帝「望月」『藝文類聚』卷一、八頁「全梁詩」卷一、九二頁
- 14 劉孝威「侍宴賦得龍沙宵月明」『玉臺新詠箋註』卷八、一三二頁「全梁詩」卷二、一二三二頁
- 15 庾信「鏡」倪璠注「庾子山集注」卷四、一九八〇年中華書局排印本三六四頁「全北周詩」卷二、一六〇四頁
- 16 「隴西行・古辭」『樂府詩集』卷三十七、五四二頁「全漢詩」卷四、七〇頁
- 17 江總「七夕」『藝文類聚』卷四、七八頁「全陳詩」卷三、一四二〇頁
- 18 庾信「舟中望月」『庾子山集注』卷四、前掲書三四七頁「全北周詩」卷二、一六〇一頁
- 19 庾肩吾「和徐主簿望月」『藝文類聚』卷一、八頁「全梁詩」卷七、一一〇三頁